

総社市埋蔵文化財調査年報 10

(平成 11 年 度)

2 0 0 1 年 3 月

総社市教育委員会

序

肥沃な平野と豊かな水に恵まれた総社市は、弥生時代以降吉備の中樞の地として栄え、国指定史跡作山古墳・備中国分寺・備中国分尼寺・鬼城山をはじめ数多くの遺跡が存在しています。これらの遺跡は、過去の歴史を語るだけでなく、これからの新しい社会・文化を築いていくための貴重な道標です。こうした歴史的・地理的風土にはぐくまれた総社市は、基本理念として、「吉備文化を継承し創造する共生と交流のまちづくり」を掲げています。

昭和29年3月31日の発足当時36,968人であった総社市の人口は、岡山・倉敷両市のベッドタウンとして、また県南の内陸工業都市としての発展を受けて漸増し、平成12年9月1日には57,221人を数えるに至りました。

こうした発展のなか、市域の整備と開発は年々増加し、市民生活は便利になってきていますが、その一方で貴重な遺跡は次々に姿を消していきっており、文化財の保護・保存が今日大きな課題となっています。やむをえず記録保存の措置を講じた遺跡の成果についても、なかなか報告書として刊行するに至らないのが現状です。こうした現状のなかで、少しでも早く事業概要と発掘調査成果を公開することを目的に年報を刊行しはじめ、今回が10冊目になります。ささやかではありますが、今後の開発と保護・保存の協議が進むことの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、当教育委員会の文化財保護行政にご指導、ご協力いただいた関係機関、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

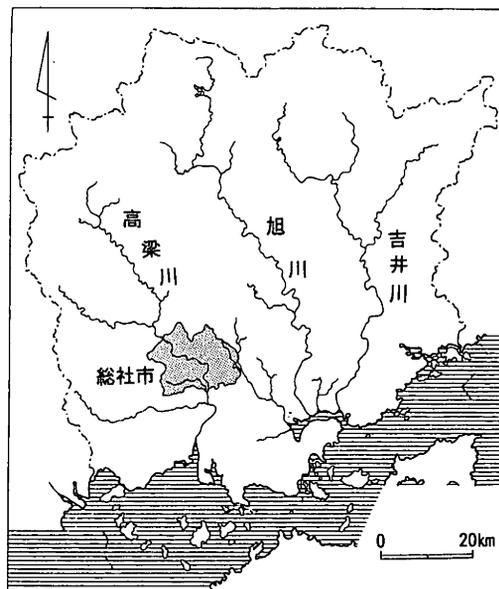
平成13年3月

総社市教育委員会

教育長 栗田交三

例 言

1. 本書は、総社市教育委員会が1999年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査及び立会・確認調査についてその概要をまとめたものである。
2. 本書は、各調査の担当者である谷山雅彦、武田恭彰、平井典子、高橋進一が執筆し、それを編集したものである。それぞれ文末に執筆者名を記し、文責とする。全体の編集は高橋が行った。
3. 遺物整理及び資料の整理にあたっては、近藤雅子・田中富子（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。
4. 本書の高度値は海拔高であり、遺構実測図の方位は、国土座標の入っているもの以外は磁北である。
5. 本書に関する実測図、写真、遺物等は、総社市埋蔵文化財学習の館で保管している。
6. 本書の刊行にあたり、御指導・御教示を賜った関係の皆様には厚くお礼申し上げます。



第1図 位置図

目 次

序

例 言

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

1999年度 文化財行政の概要 1

2. 立会および確認調査の概要

長野病院別棟新築工事に伴う試掘調査 5

(仮称) 岡山納整センター造成事業に伴う試掘調査 7

3. 発掘調査概要

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(2) 11

東総社中原本線改良事業（三須地区）に伴う発掘調査 31

駅南区画整理事業に伴う発掘調査 35

総社市立常盤幼稚園園舎移転新築工事の設計変更に伴う埋蔵文化財発掘調査 37

吉備路観光センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（本体部分） 39

目 次

第1図 位置図	第20図 砂子遺跡SD01出土遺物(2) (1/4) …………… 23
第2図 立会・確認調査位置図 (1/75,000) …………… 3 長野病院別棟新築工事に伴う試掘調査	第21図 砂子遺跡SD01出土遺物(3) (1/4) …………… 24
第3図 調査地位置図 (1/10,000) …………… 5	第22図 砂子遺跡SD01出土遺物(4) (1/4) …………… 25
第4図 トレンチ配置図 (1/1,000) …………… 6	第23図 砂子遺跡SD01出土遺物(5) (1/4) …………… 26
第5図 トレンチ断面図 (1/40) …………… 6	第24図 砂子遺跡SD01出土遺物(6) (1/4) …………… 27
第6図 出土遺物 (1/4) …………… 6 (仮称)岡山納整センター造成事業に伴う試掘調査	第25図 砂子遺跡SD01出土遺物(7) (1/4) …………… 28
第7図 調査地位置図 (1/5,000) …………… 7	第26図 土師器椀・皿法量分布図 …………… 29 東総社中原本線改良事業 (三須地区) に伴う埋蔵文化財発掘調査
第8図 トレンチ配置図 (1/3,000) …………… 9 山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査	第27図 調査地位置図 (1/8,000) …………… 31
第9図 調査区位置図 (1/5,000) …………… 11	第28図 調査区位置図 (1/2,500) …………… 32
第10図 宮ノ前遺跡遺構配置図 (1/300) …………… 12	第29図 中・近世遺構配置図 (1/400) …………… 33 駅南区画整理事業に伴う発掘調査
第11図 墨書土器 (1/2) …………… 13	第30図 調査地位置図 (1/5,000) …………… 35 総社市立常盤幼稚園園舎移転新築工事の 設計変更に伴う埋蔵文化財発掘調査
第12図 出土遺物 (1/4) …………… 14	第31図 調査地位置図 (1/5,000) …………… 37 吉備路観光センター建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査 (本体部分)
第13図 遺跡位置図 (1/5,000) …………… 16	第32図 調査地位置図 (1/5,000) …………… 39
第14図 遺構配置図 (1/200) …………… 17	第33図 調査区西半遺構配置図 (1/400) …………… 40
第15図 段状遺構出土遺物 (1/4) …………… 17	
第16図 遺跡位置図 (1/5,000) …………… 18	
第17図 遺構配置図(1) (1/300) …………… 19	
第18図 遺構配置図(2) (1/300) …………… 20	
第19図 砂子遺跡SD01出土遺物(1) (1/4) …………… 22	

表 目 次

表1 平成11年度立会・確認調査一覧表 …………… 2	表2 平成11年度発掘調査一覧表 …………… 2
-----------------------------	--------------------------

図 版 目 次

(仮称)岡山納整センター 造成事業に伴う試掘調査	第10図版 西横前遺跡完掘状況 …………… 36
第1図版 調査区全景 (北から) …………… 8	第11図版 中通遺跡3区上面完掘状況 …………… 36
山田地区ほ場整備事業に伴う発掘調査	第12図版 中通遺跡3区下面大溝完掘状況 …………… 36 総社市立常盤幼稚園園舎移転新築工事の 設計変更に伴う埋蔵文化財発掘調査
第2図版 宮ノ前遺跡遠景 (西から) …………… 15	第13図版 調査地全景 …………… 38
第3図版 宮ノ前遺跡調査区全景 …………… 15	第14図版 東側調査区完掘状況 …………… 38
第4図版 砂子A遺跡遠景 (東から) …………… 30	第15図版 西側調査区住居址完掘状況 …………… 38
第5図版 砂子A遺跡調査区全景 …………… 30 東総社中原本線改良事業 (三須地区)に伴う 埋蔵文化財発掘調査	第16図版 西側調査区完掘状況 …………… 38 吉備路観光センター建設に伴う 埋蔵文化財発掘調査 (本体部分)
第6図版 A区 中世の建物群 (南から) …………… 34	第17図版 調査前全景 (東から) …………… 40
第7図版 A区東半 下層遺構空撮 …………… 34	第18図版 2区完掘状況 (西から) …………… 40
第8図版 B区 軒丸瓦出土状況 …………… 34 駅南区画整理事業に伴う発掘調査	第19図版 3区完掘状況 (西から) …………… 40
第9図版 上三本松遺跡完掘状況 …………… 36	第20図版 3区溝-1西端木杭出土状況 (東から) …………… 40

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

1999年度 文化財行政の概要

総社市の埋蔵文化財行政は、教育委員会文化財室が担当しており、室長1人、埋蔵文化財担当職員6人、事務担当職員1人の計8人が在籍している。文化財室では、埋蔵文化財調査のほか、一般文化財の保護・啓蒙活動を執り行っている。

<組織>

教育長	秋田 皓二	主 事	高橋 進一
教育次長	守長 健尚	主 事	笹田 健一
文化財室長	加藤 信二	主 事	松尾 洋平
主 任	谷山 雅彦	〔埋蔵文化財学習の館〕	
主 任	武田 恭彰	館 長	村上 幸雄
主 事	平井 典子	臨時職員	近藤 雅子
主 事	前角 和夫	臨時職員	田中 富子

〔埋蔵文化財〕

1999年度の埋蔵文化財発掘調査は、依然として続く経済活動の景気低迷を反映して、大型の民間開発事業は沈静化したままであるが、民間の自動車会社による納整センター建設計画が具体化し、総社市としては、1995年度に実施した水島機械金属工業団地西団地の拡張に伴う発掘調査以来の大規模な民間開発による発掘調査となった。また、個人消費に対応したサービス産業の拡充は著しく、店舗・住宅・病院建設などの小規模開発は増加の傾向にあり、共同住宅の建築とあわせて、確認・立会調査の大半を占めている。

本年度の発掘調査件数は7件のほり、延べ調査日数は約34ヶ月である。内訳は、公共事業であるほ場整備2件、区画整理事業に伴う発掘調査1件、市道建設に伴う発掘調査1件、幼稚園建設1件、観光施設建設1件と、民間開発による（仮称）岡山納整センター建設に伴う発掘調査1件であった。また岡山県教育委員会が実施した、国指定史跡鬼城山の城内確認調査に職員を1～2名派遣した。

〔文化財保護・啓蒙〕

文化財保護では、市指定史跡経山城、市指定石造美術種子十三仏に標柱を設置し、見学者の利便を計った。

指定史跡の下刈り清掃は、鬼城山・経山城・作山古墳・宮山墳墓群・栢寺廃寺・江崎古墳・秦原廃寺について実施した。

鬼ノ城については、12月17日と3月1日に鬼城山整備委員会を開催し、城内確認調査の成果と、環境整備基本計画案の策定について協議し、本格整備に向けた態勢を整えた。

また、文化財指導者研修会と全国遺跡環境整備会議に職員を派遣し、研修を行った。

（高橋進一）

表1 平成11年度立会・確認調査一覧表

番号	所在地	調査原因	調査日時	調査所見
1	真壁316外	食品工場新築	4月6日	遺構・遺物なし
2	駅前1-2-102, 103	旅館新築工事	4月12日	遺構・遺物なし
3	小寺字庚砂370-5 外	総社学園進入路	4月14日	古代～中世の遺構
4	井出381	浄化槽立会	4月15日	遺構・遺物なし
5	総社447	個人住宅新築	5月19日	土師器・須恵器
6	総社2-844-3	病院別棟新築工事		別記
7	溝口110-1	マンション新築工事	8月23日	弥生土器?破片
8	井尻野	工業団地造成工事	10月6日	遺構・遺物なし
9	中央4-2	個人住宅新築工事	10月21日	弥生時代?
10	小寺133-1	共同住宅新築工事	11月30日	河道
11	中央4-1-114	下宿新築工事	12月28日	弥生時代包含層
12	刑部字白井69-3	個人住宅新築工事	1月11日	弥生～中世
13	槇谷727	NTT鉄塔建設	2月29日	遺構・遺物なし
14	新本国司神社	神社改築・進入路	3月9日	遺構・遺物なし
15	市後遺跡群	納整センター建設		別記

表2 平成11年度発掘調査一覧表

	遺跡名	所在地	調査契機	調査期間	報告
1	宮ノ前遺跡	山田2462-2 外	ほ場整備事業	4月1日～3月31日	P-11
2	上三本松遺跡	三輪771外	幼稚園建設	4月12日～6月30日	P-37
3	上三本松・上川田遺跡	三輪 968外	区画整理事業	7月1日～1月20日	P-35
4	牛塚古墳	久代895-5	納整センター建設	12月6日～3月31日	なし
5	牛神遺跡・東田遺跡	三須1180外	市道建設	12月13日～3月30日	P-31
6	砂子遺跡	山田 317外	ほ場整備事業	1月5日～3月21日	P-18
7	御崎神社前遺跡	小寺292-5外	学校進入路建設	1月12日～2月29日	なし
8	天満遺跡	三須 825-1外	観光施設建設	2月1日～3月15日	P-39



第2図 立会・確認調査位置図 (S=175,000)

2. 立会および確認調査の概要

長野病院別棟建設に伴う試掘調査

所在地 総社二丁目844-3・5

調査期間 1999年6月9日

調査概要

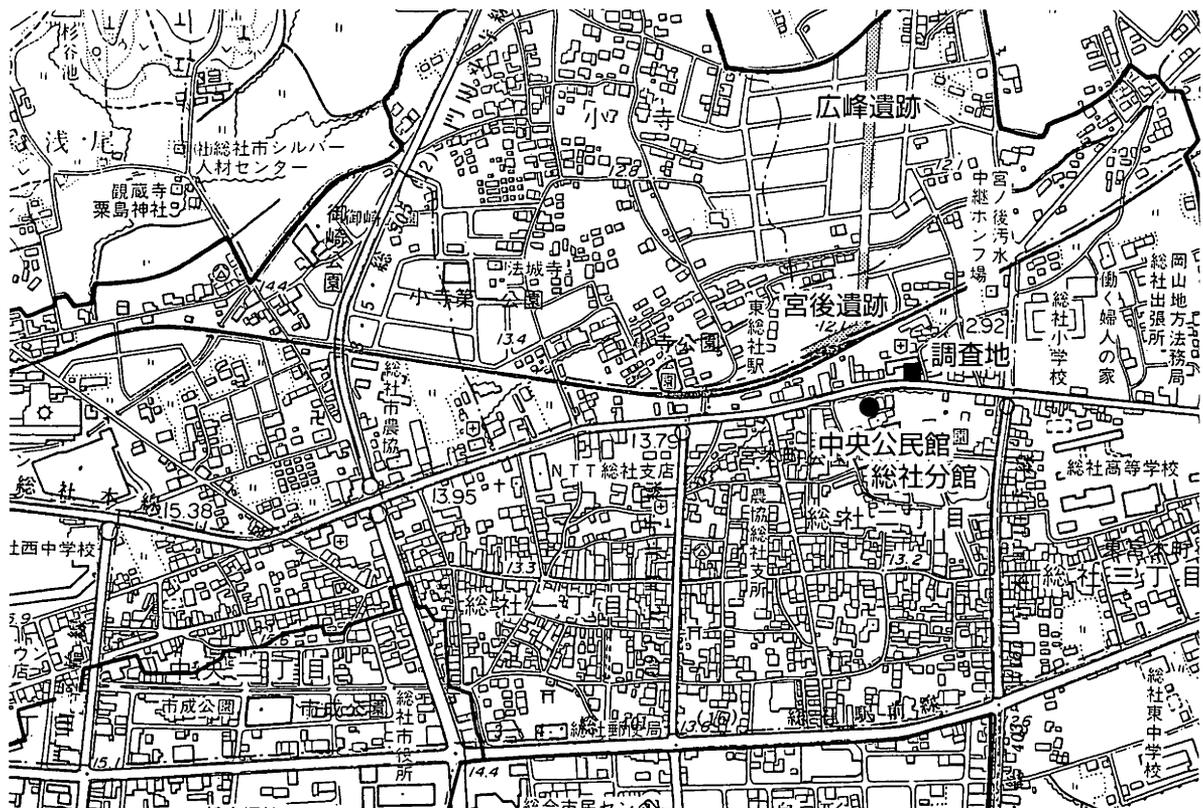
2000年4月からの介護保険実施に伴い、長野病院においても老人介護の設備を充実すべく、既存病棟の東南に通所リハビリ、訪問看護ステーション、理学療法室を完備したケアセンターを建設する計画がもちあがった。

建設予定地から約100m以北では、小寺区画整理事業に伴う発掘調査によって、広峰遺跡、宮後遺跡など古代から中世の集落跡が確認されている^註。宮後遺跡では比較的遺構密度は薄いものの、今回の建設予定地にまで遺跡が広がる可能性もあるため協議を行い、事前に試掘調査を実施し遺構が検出された場合は発掘調査を行なうこととした。

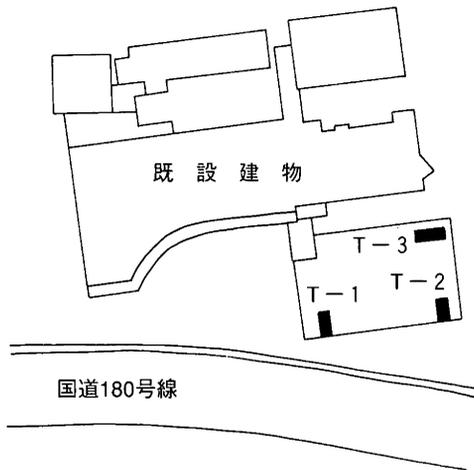
確認のトレンチは3箇所設定した。

各トレンチとも同様の土層を呈しており、中世以降と思われる水田層が何層にも堆積しており、いずれのトレンチからも微高地の上がり確認できなかったため、ケアセンター建設予定地はすべて低位部にあたることが認められた。土層から平面調査による畦の検出は困難なため、トレンチ内の断面観察で調査を終了した。

当該調査地から約80mほど南西に位置する総社市中央公民館総社分館の改築工事の際、青色粘土層が厚く堆積していたことが確認されている。このことから微高地は調査地より北側に広がり、調査地



第3図 調査地位置図 (S=1/10,000)



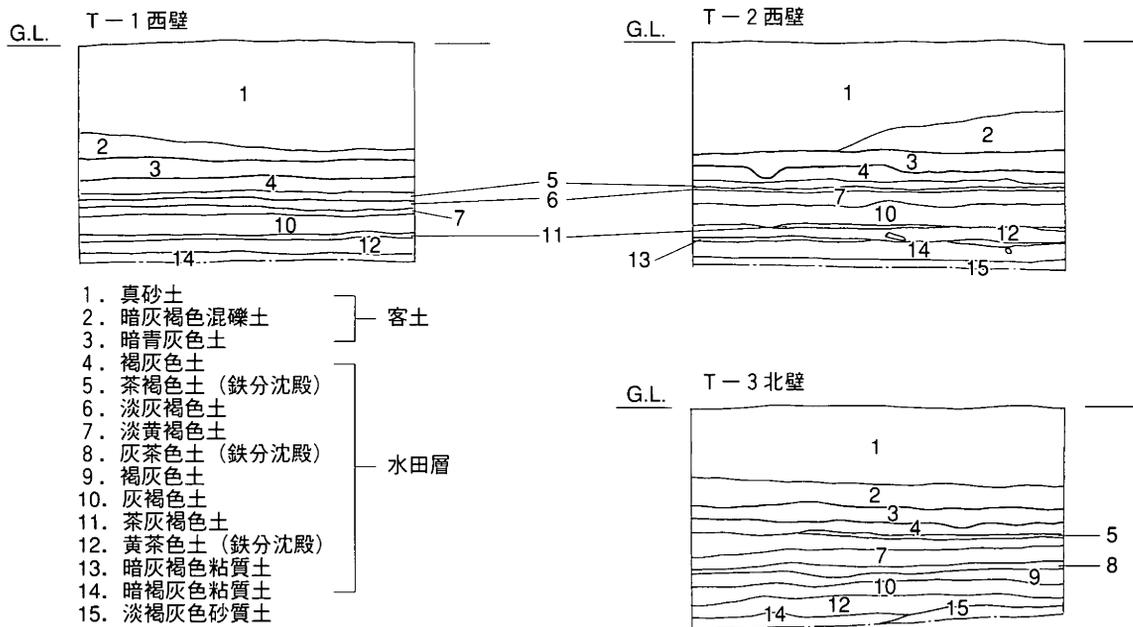
第4図 トレンチ配置図 (S=1/1,000)

を含め南に向けて地形は下がっていき低位部を形成するものと思われる。

遺物は、土器片が数十点出土したが、実測に耐え得るものはほとんどなく、わずかに4点が図示できたにすぎない。1～3は須恵器甕の胴部小片である。古墳時代後期～古代の所産である。4は、黒色土器A類の小片で平安時代に属する。

図示できなかった遺物の中にも、古墳時代前期以前の土器片はみられず、小寺区画整理事業に伴う発掘調査の成果と併せ、当調査地の北側に広がる微高地は、早くとも古墳時代後期以降に利用されたものと考えられる。(平井典子)

註 高田明人「小寺区画整理事業に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』4 1994



第5図 トレンチ断面図 (S=1/40)



第6図 出土遺物 (S=1/4)

(仮称)岡山納整センター造成事業に伴う試掘調査

遺跡名 市後遺跡群

所在地 総社市久代974-1外236筆

調査期間 1999年5月25日～1999年6月28日

調査面積 約300㎡

(仮称)岡山納整センター造成事業は、新車の納車前整備を一括して集中整備し、それぞれの営業拠点に配送するための集中納整センター建設に伴う造成工事である。月間の納整台数は、6,000台を予定しており有効敷地として約110,000㎡が必要となった。また、立地条件としては有効面積の確保、港からのアクセス、塩害のないこと、中国・四国地区への配送ルートが確保できることであった。これらの条件を満たす既造成地がないことから、新たに選地し造成することとなった。

総社市久代地区は、交通網の整備により港や高速自動車にアクセスし易い位置にある。このため、久代地区では過去においても工業団地が造成された経緯があり、今回はこの工業団地に隣接する丘陵部2か所とその間の谷部が開発されることとなった。

この地は、開発が計画された時点においては遺跡の存在は明確ではなく、「吉備郡史」に古墳の記載があるのみであった。また、大正から昭和にかけて農地の区画整理が実施され多くの畑にブドウが栽培され、地形の改変が進んでいた。さらに、このブドウのハウスが放置され原野に等しい土地が増加していた。



第7図 調査地区位置図 (S=1/5,000)

この開発地区においても、先の開発で多くの遺跡が発見された工業団地同様に周知されていない文化財の存在が予測されたので、平成11年3月31日に事業者・岡山県教育委員会・総社市教育委員会の3者で文化財保護に関する覚書を締結した。

この覚書に基づいて、用地内の埋蔵文化財試掘調査を総社市教育委員会で実施することとした。この時点では、耕作や果樹の収穫などの予定があるため、掘削可能な土地を選んで試掘調査を実施し、立木の伐採などは行わなかった。

調査は用地中央の水田部分から開始したが、湧水のため北端部分は後日とし、水田部分でも高所にあたる所（T-1～3）から調査することとなった。

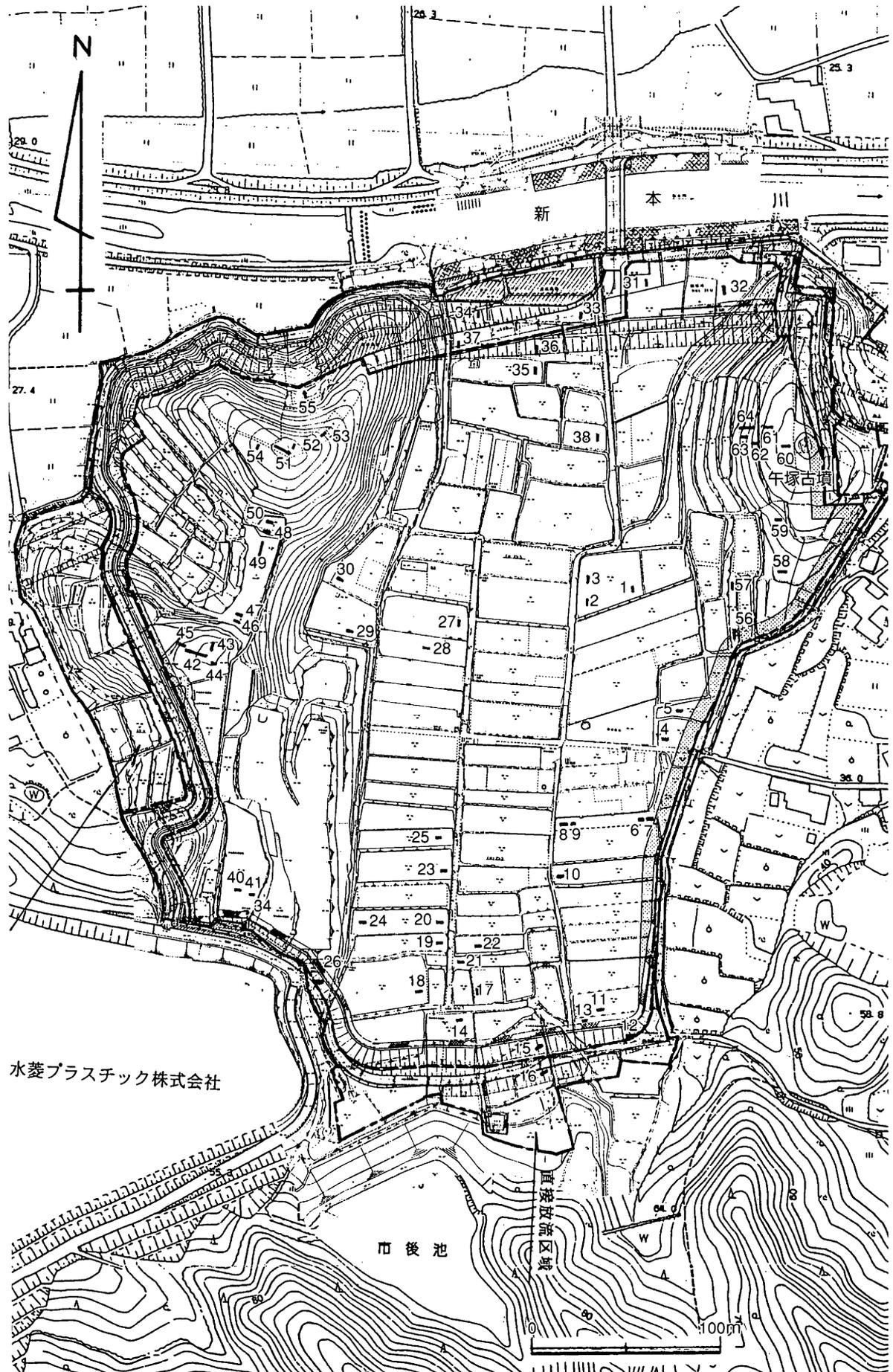
調査は土地承諾の制約や土地の改変があるため、遺跡の範囲を明確に押さえることはできなかった。用地全体では設定したトレンチ64本のうち、遺構等が無かったのは36本だけであった。今回の調査で遺構の希薄な地区は、西尾根東斜面付近（T-27～30, 35～37）だけであった。

調査の結果から、両丘陵部分には弥生時代の集落と古墳が、水田部分の高所には弥生時代から古墳時代にかけての集落が存在し、用地の最も南部分では地下げが進んでいるが製鉄関連の遺構が存在することが明らかになった。この内東丘陵上の古墳（牛塚古墳）が、径20mを越えることが明らかになり県教育委員会の指導を得ながら事業者と保存協議を重ねたが、現状保存が困難であることから、記録保存のための調査を実施するため、平成11年10月4日に事業者と総社市が発掘調査覚書を締結し、発掘調査を開始することとした。事業が平成12年度に亘るため、調査概要は平成12年度に報告したい。

（谷山雅彦）



第1図版 調査区全景（北から）



第8図 トレンチ配置図 (S=1/3,000)

3. 発掘調査の概要

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(2)

遺跡名 宮ノ前遺跡

所在地 総社市山田

調査期間 1999年2月8日～1999年4月30日

調査面積 1450㎡

平成10年度より開始した山田地区のほ場整備事業に伴う発掘調査は、年度の前半は丘陵部の調査を行い、後半は平地部を対象として人力による確認調査を実施してきた。

この結果を受け現集落周辺で確認された宮ノ前遺跡について、工事により影響を受ける部分約2000㎡を対象とした発掘調査を10年度の2月より開始した。

宮ノ前遺跡が所在する山田地区の現集落は、北に聳える急峻な要害である鬼ノ身城が位置する山塊から流れ出る山田川を挟み、南北に細長く古い家並みが伸びている。

この集落の基本的な地割りについては、14世紀に鬼ノ身城へ入城した今川氏により形成されたと伝えられているが、今回の確認調査時に二ヶ所のトレンチで、集落の中心を南北に貫く幅約10mの道路状の高まりが部分的に検出された。この道路状遺構は一部砂利敷で、低湿地を埋め立てて直線的に伸びており、側溝から出土した土器からみて14世紀に機能していたことは確実と考えられる。

また、16世紀末に鬼ノ身城は宇喜多氏に対する毛利氏の最前線に位置し、関が原の役まで在城した宍戸氏により城下町の整備が行われたと言われており、今回の調査で確認され、11年度に調査を実施した古町遺跡がこの時期の遺跡と考えられる。

宮ノ前遺跡は、北側の山塊から集落の東側を遮って南に派生する低い丘陵を背にしており、遺跡は南向きの浸食が進んだ段丘端部に所在している。

調査の対象となった部分は扇状に広がる遺跡の南端にあたり、中心部には人家が存在しているため、今回の調査では遺跡の一端が明らかになったに過ぎない。

発掘調査は重機により現水田層と鉄分・マンガンが集積した鋤床層を除去し、人力で灰色砂質土の中世水田面を検出した。この段階で調査区の南端を東西に走り中世に掘削されたと考えられる、木杭を多数打ち込んだ溝状の落ち込みが確認された。



第9図 調査区位置図 (S=1/5,000)



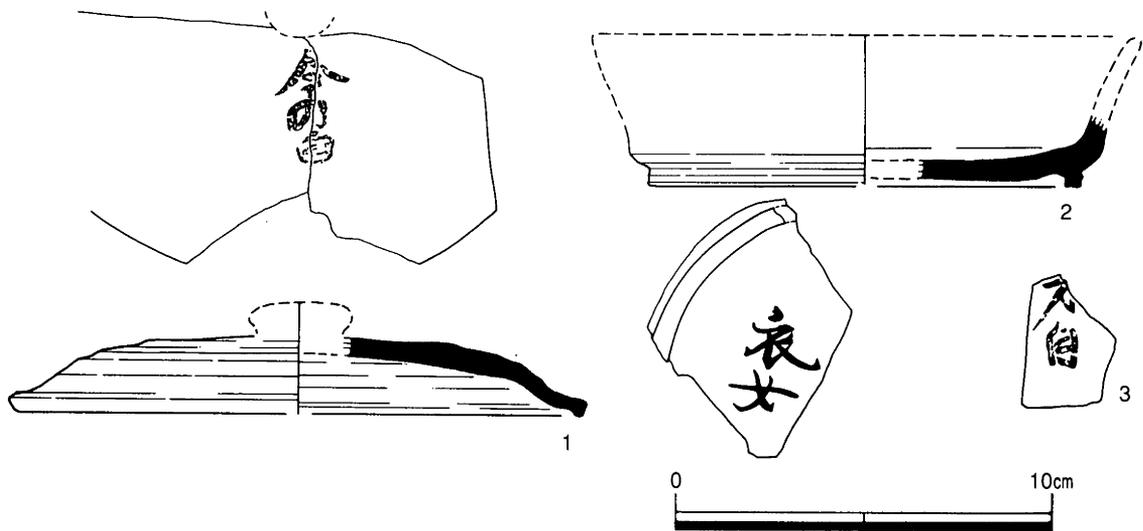
この溝状の落ち込みは土層断面からみて、平安期までの低位部を利用し、水田の水利用に新たに開削した幹線的な大溝であると理解できた。

また、この溝が現在の畦畔と方向が同一である点から、中世水田の畦畔は検出できなかったものの、集落の地割りと同様に、この地域の現在の水田の基本的な

景観も中世段階に形成された可能性を示している。

中世段階の遺構面は、西の現集落方向から南と東にやや下降しており、検出された柱穴も僅かなことから大半が水田であったとみられ、溝からの出土遺物の少なさもその点を示していると思われる。

第10図 宮ノ前遺跡遺構配置図 (S=1/300)



第11図 墨書土器 (S=1/2)

次に、中世水田層を除去し、下層遺構の検出を行ったところ、暗黄色～黄褐色の地山に近い面で多数の柱穴と、調査区の中央で南北方向に掘られた溝が確認できた。

遺構の検出はマンガン・鉄分の沈着が著しいため困難を極めたが、確認できた柱穴の規模と埋土を大別すると、径30cm以下で黒灰色のものと、径30cm～60cmで灰褐色のものがあり、後者が大半を占める。これらの柱穴の配列から推定される建物は、配置に特別な規格性はみられないが、規模を問わずいずれも方位に合致して建てられている点が特色である。

判明した建物の内、SB01～03の柱穴は一様に黒灰色の埋土で、柱材の抜き取り後に埋められた土器（第12図33～37）から9世紀中頃の所産であると推定できる。

他の建物については、明確に時期を特定できる遺物を共伴してはいないが、遺構検出面と低位部から出土した土器が8世紀第2四半期（第12図4. 5. 7. 9. 10. 12. 13. 16～19. 23～32）と8世紀末葉（第12図6. 8. 11. 14. 15. 20～22）に大別できることから、その存続期間はその二時期を中心としたものであるとみられる。

8世紀代の建物は2間×3間～4間のものが多く、柱の掘形は方形ではなく円形を呈し、SB08では大半の柱穴底部に直径25cm程度の柱材が遺存していた。

また、2間×2間の倉庫とみられる総柱建物のSB05, 10, 12, 13の4棟は、いずれも近接して建て替えられており、倉庫だけが長期間存続する点は遺跡の性格を考慮するうえで興味深い。

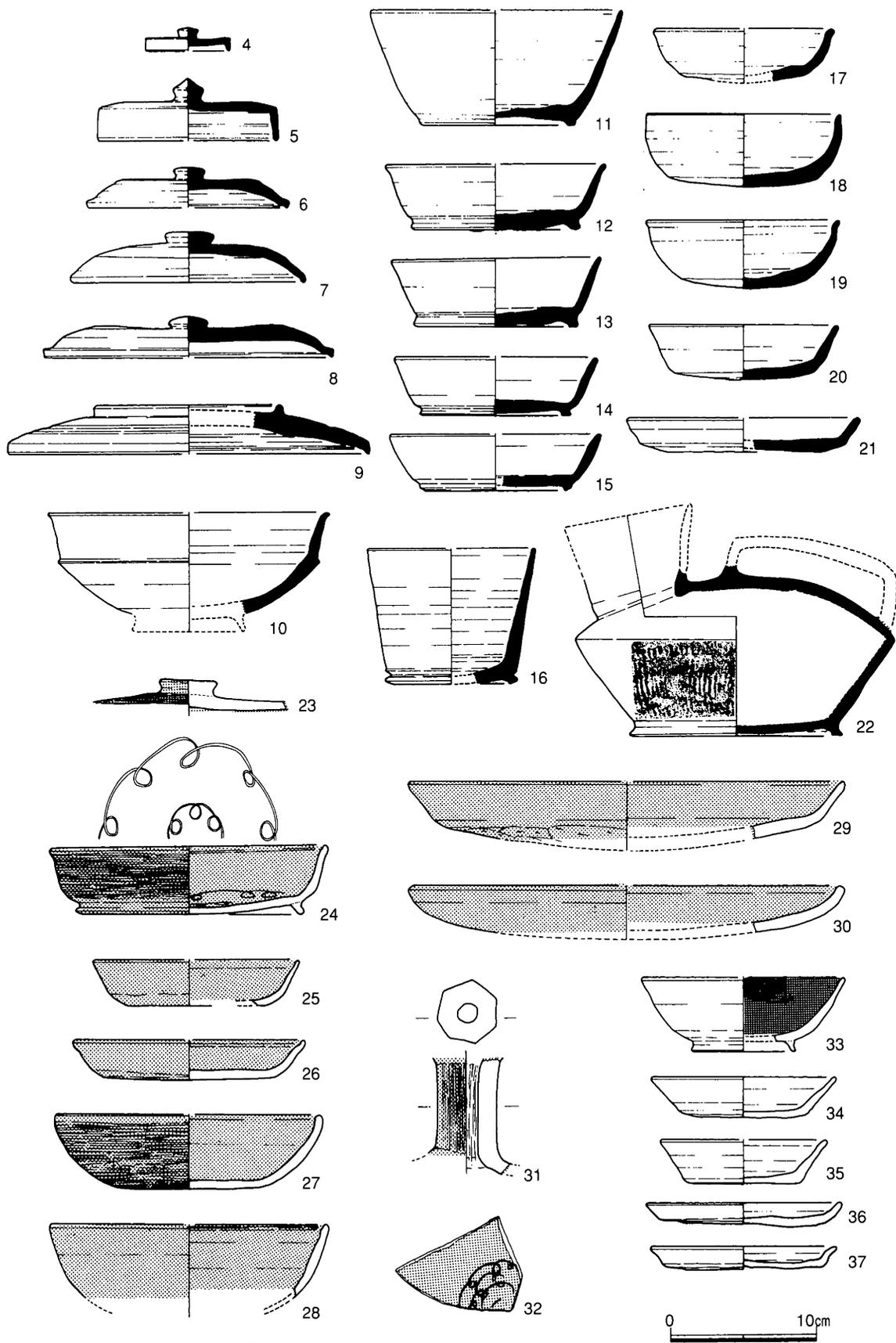
以上が遺構の概略であるが、まず、建物の規模・配置からみると、方位に合致して建てられているものの、その配置は不規則で官衙的な性格は薄く、自然発生的な村落の要素が強い。

一方、出土遺物からみると丹塗り土師器・円面硯・稜椀・椀B等、官衙特有の土器がまとまって出土している点から一般の集落とは考え難い。敢えて言うならば郡の下部組織である郷段階の行政機構である「郷衙」とみることもできるが、現段階では類例が乏しく可能性を指摘するに留めたい。

また、低位部からは墨書土器⁽¹⁾が8点出土しており、内3点は「今刀自」、「○刀自」、「衣女」と判読することが可能で、いずれも8世紀末葉の須恵器・土師器である。（第11図1～3）

この「刀自」とは地位のある女性に対する尊称であり、「衣女」も個人の名である可能性が高く、村落内の祭祀に係わる人物、若しくは郷長の妻を表していると考えられる。（武田恭彰）

註(1) 墨書土器の判読と意味については、京都橘女子大学教授の狩野久先生に御教示を得た。記して感謝申し上げます。



薄いスクリーントーンは丹塗り
 濃いスクリーントーンは黒色土器

第12図 出土遺物 (S=1/4)



第2図版 宮ノ前遺跡遠景（西から）



第3図版 宮ノ前遺跡調査区全景

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(4)

遺跡名 樽見遺跡

所在地 総社市山田

調査期間 1999年9月13日～1999年10月4日

調査面積 245㎡

今回、調査の対象となった。樽見遺跡は、平成10年度に調査を実施した樽見古墳群が所在する尾根から、狭小な谷を挟んで西側に位置する小尾根端部の南向き斜面に位置する。

この地点は、樽見古墳群の調査の契機となった基盤整備に伴う集落道が、尾根端部の斜面を東西に切断する形で走るため、遺跡の有無についての確認調査を先ず実施した。

この結果、斜面全体に遺構が広がることが確認されたが、事業課と協議の結果、両脇が谷である地形から設計変更は困難との結論になり、止むを得ず掘削される部分約245㎡について発掘調査を行い記録保存の処置をとることとなった。

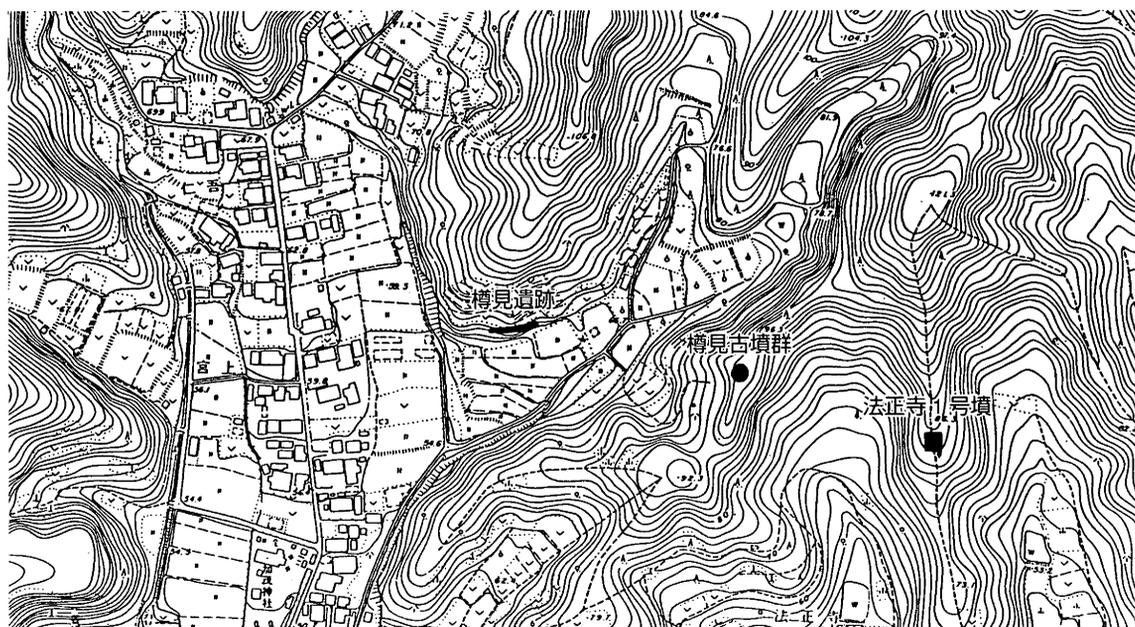
発掘調査は古町遺跡の調査と平行して行い、重機により畑の表土を除去した後に、人力で遺構の検出を行った。遺構は背後の尾根の花崗岩土が斜面堆積した地山に掘り込まれており、7世前半の段状遺構1ヵ所と、石材を抜き取られた横穴式石室の古墳1基、古代の自然流路1条を確認した。

段状遺構(SX01)は調査区の幅が狭いため全体の規模は不明であるが、調査区外の地形を勘案すれば斜面を方形に削平した幅約19m×10m程度の平坦面と推定できる。山側の壁面には小規模な竈状の焼土が認められるが、竪穴住居のような垂直の壁ではなく、壁体溝もみられない。

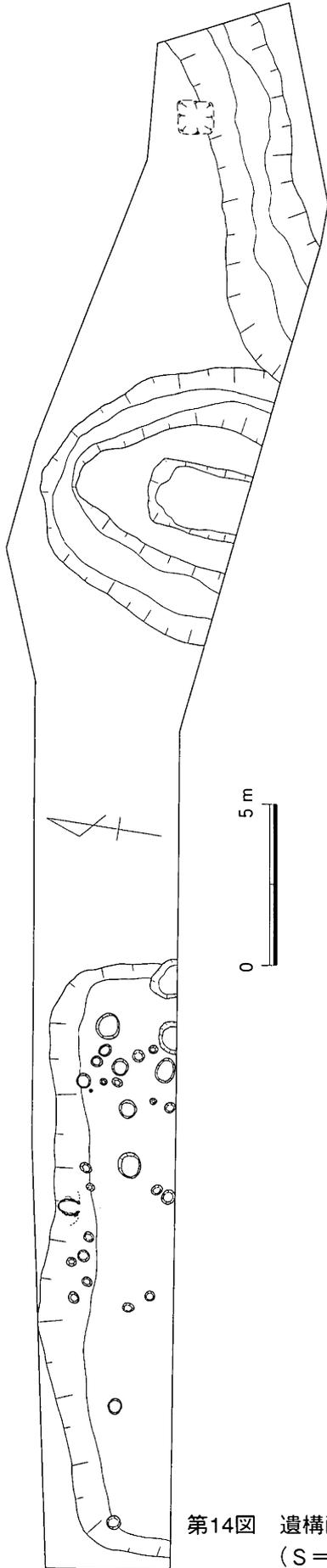
また、床面上には柱穴の他に炭窯と考えられる壁面の焼けた土壌や、鉄滓が遺存していた点から鍛冶関係の作業場とみることが妥当であろう。

この段状遺構の時期としては、床面直上からまとめて出土した須恵器、土師器(第15図)から7世紀の初頭と考えられる。

古墳(樽見谷1号墳)は一部調査区外のため、墳丘の規模についての正確な数値は知り得ないが、



第13図 遺跡位置図 (S=1/5,000)

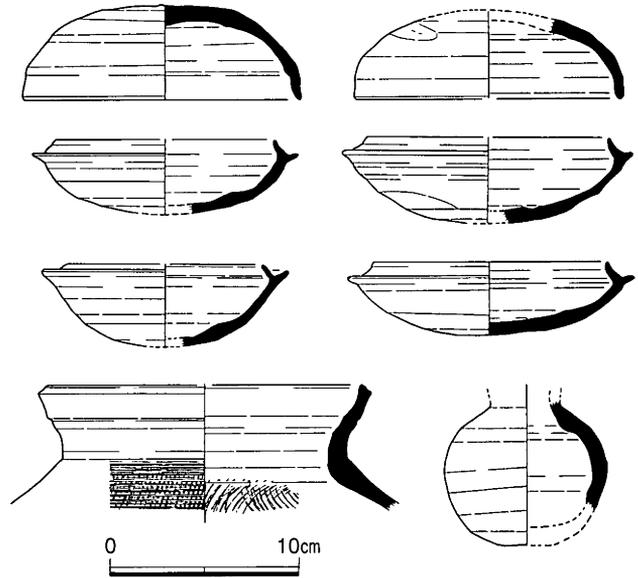


第14図 遺構配置図
(S=1/200)

調査した部分から推定して5 m × 8 m程度の楕円形を呈すると考えられる。

石室は石材を全て抜き取られているため、正確な規模は不明であるが、掘形底部の石材据え付け穴から幅約1 m程度であったと推定できる。地山を切って馬蹄形に掘られた周溝は、幅1～2 m、深さ1.5m～80cmを測る。

今回、調査した樽見谷1号墳は谷の南向き斜面に多数存在し、近世の開墾により消滅した群集墳に含まれると思われ、時期を直接明示する遺物は皆無であるが、7世紀前半代に含まれるとみて大過ない。
(武田)



第15図 段状遺構出土遺物 (S=1/4)

山田地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査(5)

遺跡名 砂子遺跡

所在地 総社市山田

調査期間 1999年12月2日～2000年4月30日

調査面積 3260㎡

今回、調査の対象となった砂子遺跡は、旧山田村と旧新本村を隔てる砂子山の北側に位置し、裾部に広がる北向き緩斜面に所在している。

遺跡が立地する緩斜面は、山裾を湾曲して流れる山田川により、北側と東側を谷状に著しく浸食されており、河川敷と斜面部の水田面では10m以上の比高差を有している。

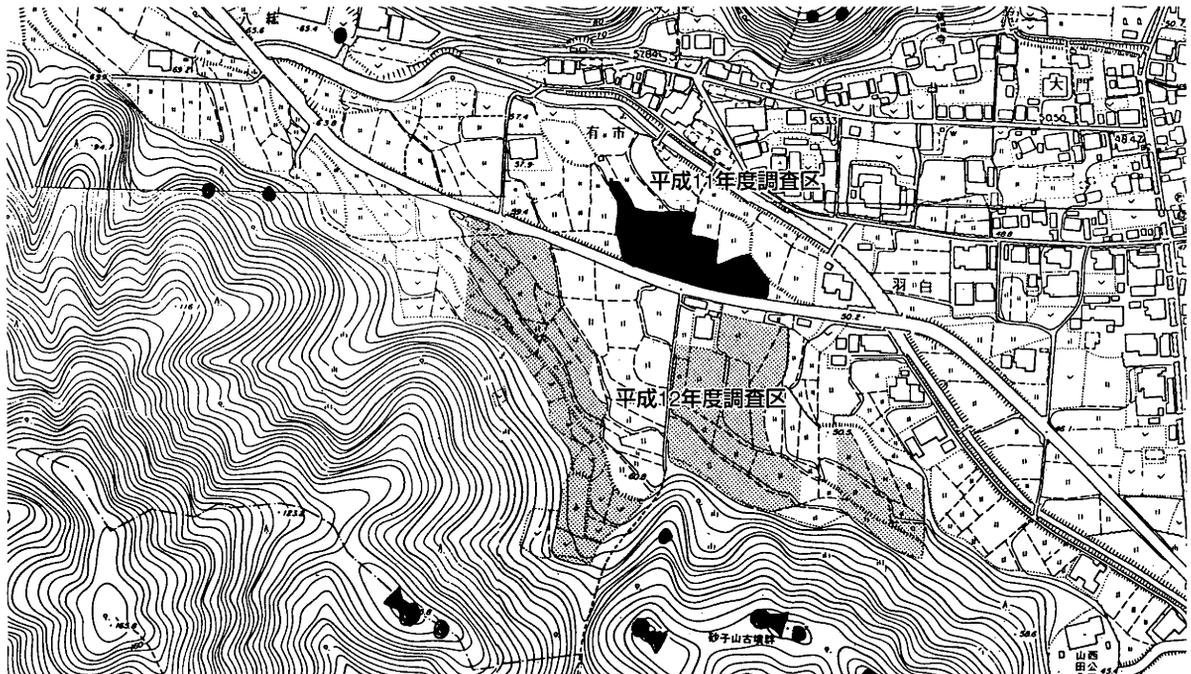
この砂子山周辺は、尾根上の前方後円墳を含む砂子山古墳群をはじめ、裾部にも横穴式石室を主体部とする後期古墳多数が確認されており、現地地形からみても遺跡はこの斜面全体に広がることが予想された。このため、稲刈り後に削平の対象となった全ての水田にトレンチを設定し、重機を用いて掘り下げ遺構の有無について確認調査を行った。

この結果、全ての地点で遺構を確認したため、改めて事業課と協議を行い、可能な限り設計を変更し盛土保存おこなうよう努めた。しかしながら地形の勾配を勘案すると、水田面積確保のため大半が変更は困難であるとの結論に達し、止むを得ず記録保存の処置を執ることとなった。

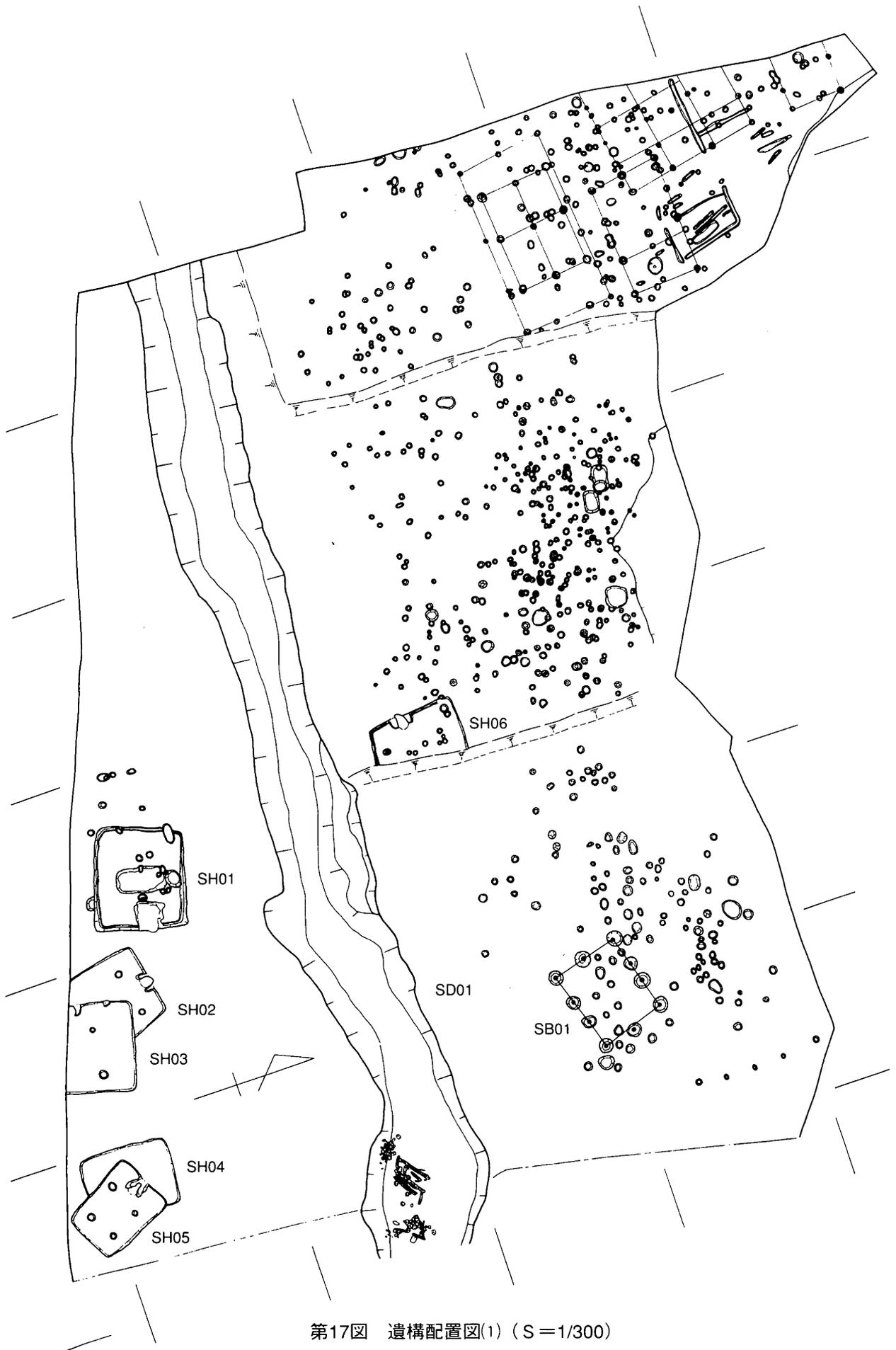
平成11年度は、斜面の中央を東西に走る現県道の北側約3000㎡を対象として発掘調査を実施することとなり、12月より調査に着手した。

発掘調査は重機を用いて水田耕土と石垣等を除去した後、人力で近世以前とみられる砂質灰色土の包含層を掘り下げ、黄褐色の地山面を精査し遺構の検出を行った。

この結果、調査区のほぼ中央に中世段階に掘られた東西に走る大溝（SD01）と、多数の柱穴・集石遺構が検出された他、古墳時代の竪穴住居址9軒の存在が明らかになった。



第16図 遺跡位置図 (S=1/5,000)



第17図 遺構配置図(1) (S=1/300)

検出された大溝（SD01）は古墳時代の包含層を切っており、その規模は長さ約71m、幅4～7m、深さ1～2mを測る。未調査部については地形の改変のため正確に推定し得ないが、段丘を南北に分断するかのように、ほぼ東西方向で直線的に掘削されていると考えられる。

大溝の土層は上下二層に大別することが可能であり、上層が周囲から流れ込んだ細かい灰褐色土であるのに対し、下層は荒砂と細砂が、炭混じりの灰色粘土を挟んで細かく堆積した状態が看取できた。

上層の堆積土中からは、流れ込んだ古墳時代の包含層の遺物に混じり近世の陶磁器が出土したことから、一帯は最終的には近世以降に一帯が水田化されたとみられる。



第18図 遺構配置図(2) (S=1/300)

一方、下層の砂層中からは特に底面近くから、中世段階と考えられる大量の土師器・陶磁器の他、木片・木橋の構築部材がまとまって出土した。

出土した土師器の椀・皿は、完形や使用の磨滅がみられないものも多く、その出土状態は大溝の北側で検出された集落の方向から、一時期にまとまって投棄されたことを示すように重なり合った状態のものが多い。

これに対し壺・甕・鉢・鍋等の大型品と、青磁・白磁は部分的な破片が散在した状態で出土しており、日常的な使用による破損品を生活廃棄物として投棄したと考えられる。

以下、出土した遺物の概要を器形・器種別に述べる。

1～19（第19図）は青磁の椀で、破片のため図化し得ないものも含めると椀だけで約50個体以上が出土しているが、青磁皿20～32（第19図）の破片を含めた個体数は半分強の約30個程度に留まる。33は青磁の水注、34～37は青磁の壺である。

38～88（第20・21図）は土師器の椀で、破片も含めて高台で計数した個体数は587に上り、出土した供膳具の7割強を占め、内5個の底部外面には「×」の墨書が認められる。

土師器椀は全て、中世前期の岡山県南部の沿岸地域に普遍的に分布する「吉備系土師器椀」と呼ばれるもので、その法量は86を除き大半が口径15cm～14cm、器高5cm前後に収まる。（第26図）

89～95（第21図）の坏は破片を含めても確認できた個体数は25個で、供膳具全体では0.3%を占めるに過ぎず、7個体しか確認できなかった97～99の足高台皿と共に、数量的には特殊な器形といえよう。同様に151～162（第23図）の深皿も確認できた個体数が31個で0.4%に留まる。

量的には椀の次を占める底部ヘラ切りの皿100～150（第22・23図）は総数で178個が確認されており、供膳具全体では21%を占め、その法量は大半が口径8cm前後、器高1.5cm前後に集中している。

次に調理具・貯蔵具について概要を述べる。163は羽釜、164・165は鍋、166は鉢で鍋の外面には煤が厚く付着している。167・168の瓦質の甕は外面が格子目叩きで、口縁部に斜格子のヘラ描きが施されている。169と170は瓦質の甕で同一個体の可能性が高く、外面には平行叩き、内面には無文当て具の痕跡を留める点から亀山窯の製品とみられる。171～173の鉢の内、須恵質の171・172は魚住産、瓦質の173は亀山窯産と考えられ、いずれも内面は使用による磨滅が著しい。

174は須恵質の大甕で焼成・調整から備前産、175～179の須恵質の甕は外面の平行・格子目叩きと、内面の無文当て具痕跡から亀山窯の製品と思われる。

180は瓦質の壺で外面の格子目叩きと焼成から亀山窯産、181の焼締陶器は備前産とみられる。

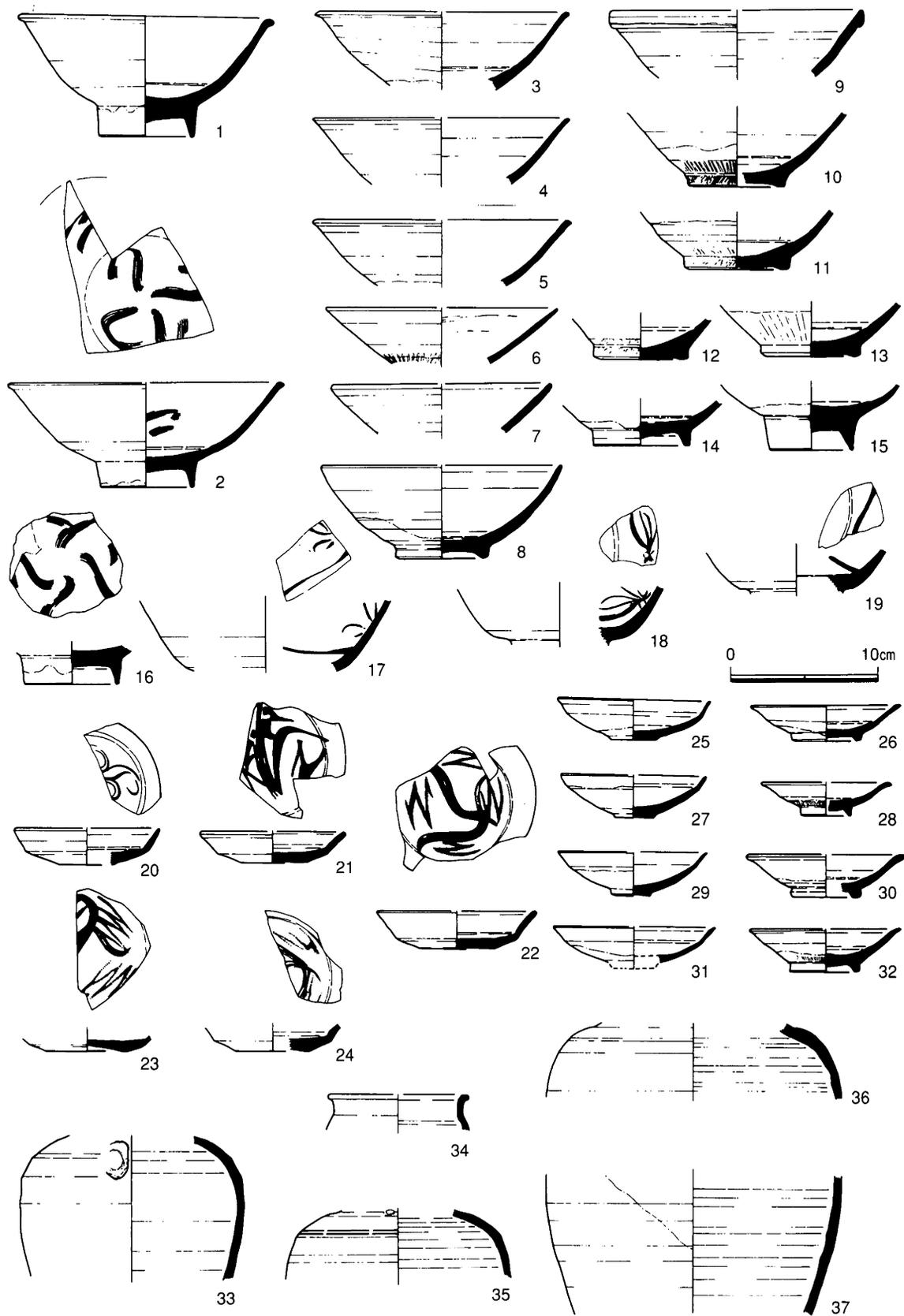
この他に土器と同じ砂層からは、下駄・箸等の木製品と墨書のある板片が出土した。

墨書板は部分的な破片のため全体は判読できないが、「敬白…、奉勤修種…、奉仁王般…」等の文字が辛うじて確認でき、掲示用の釘穴もある点から、何らかの宗教行事に使用された木札と考えられる。

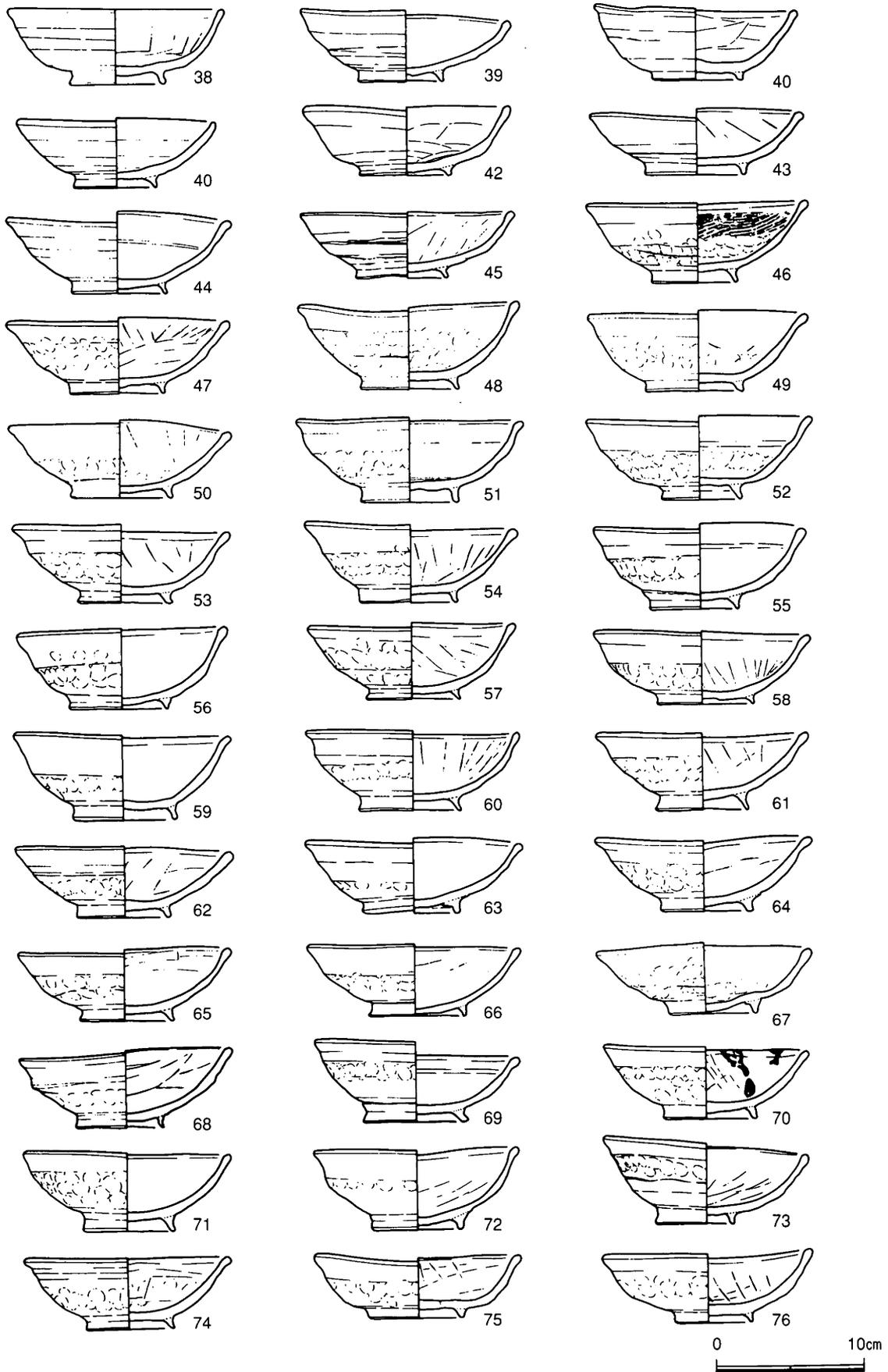
以上が大溝の下層から出土した遺物の概要であるが、前述のように土師器の供膳具は出土状況とその法量から、一時期の使用・廃棄が想定され、他の陶磁器が若干の時期幅を有する点と対比的であり、土師器供膳具の儀器的な使用形態を窺うことができる。

出土した遺物の時期については、使用期間が短く量的にも主たる土師器椀の法量を、他の遺跡の出土例と比較すると、ほぼ12世紀末葉と考えられる資料に近い数値を示す。

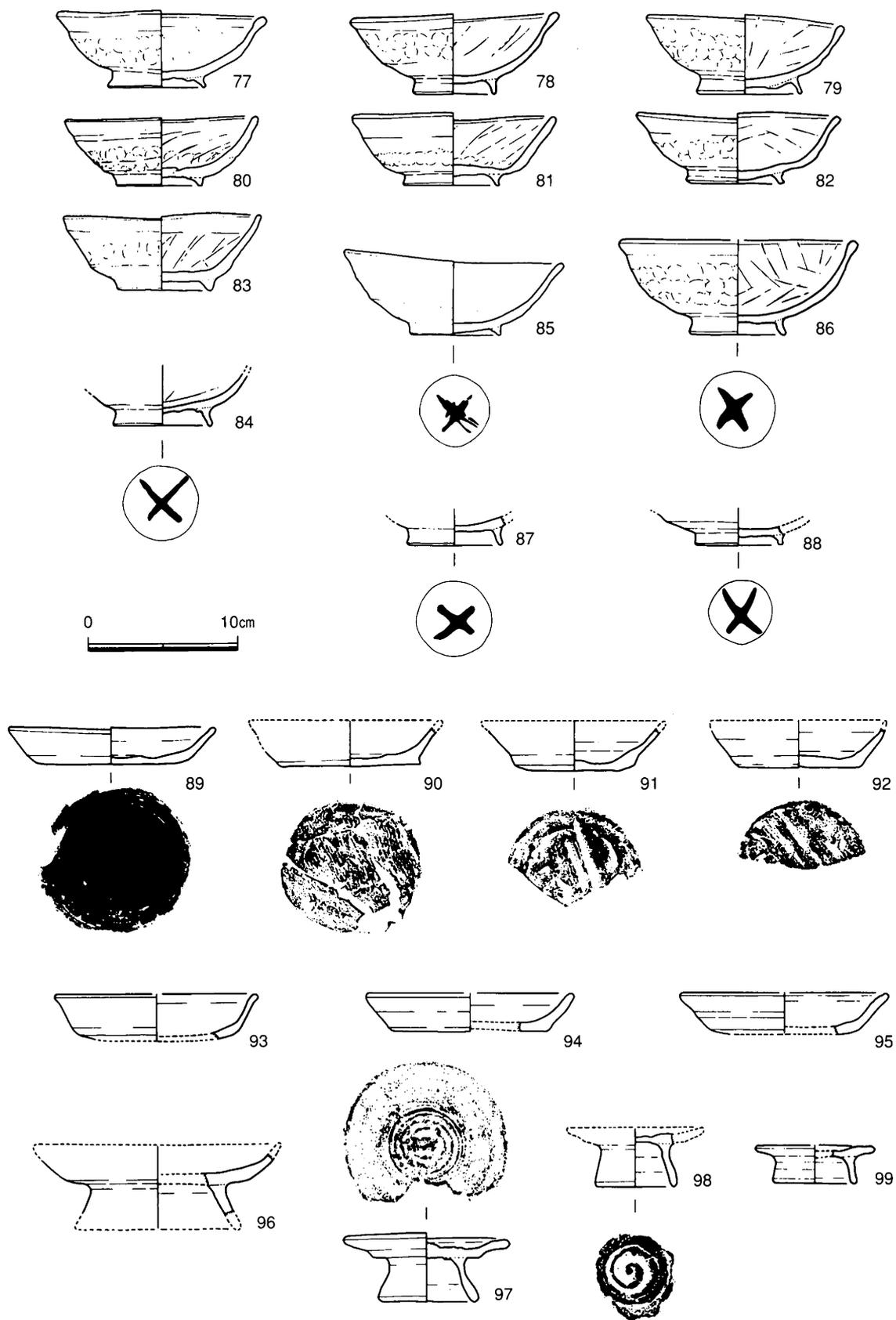
また、坏・皿の法量も近似し、陶磁器の年代にも矛盾がない点から上記の年代を妥当と考えるが、



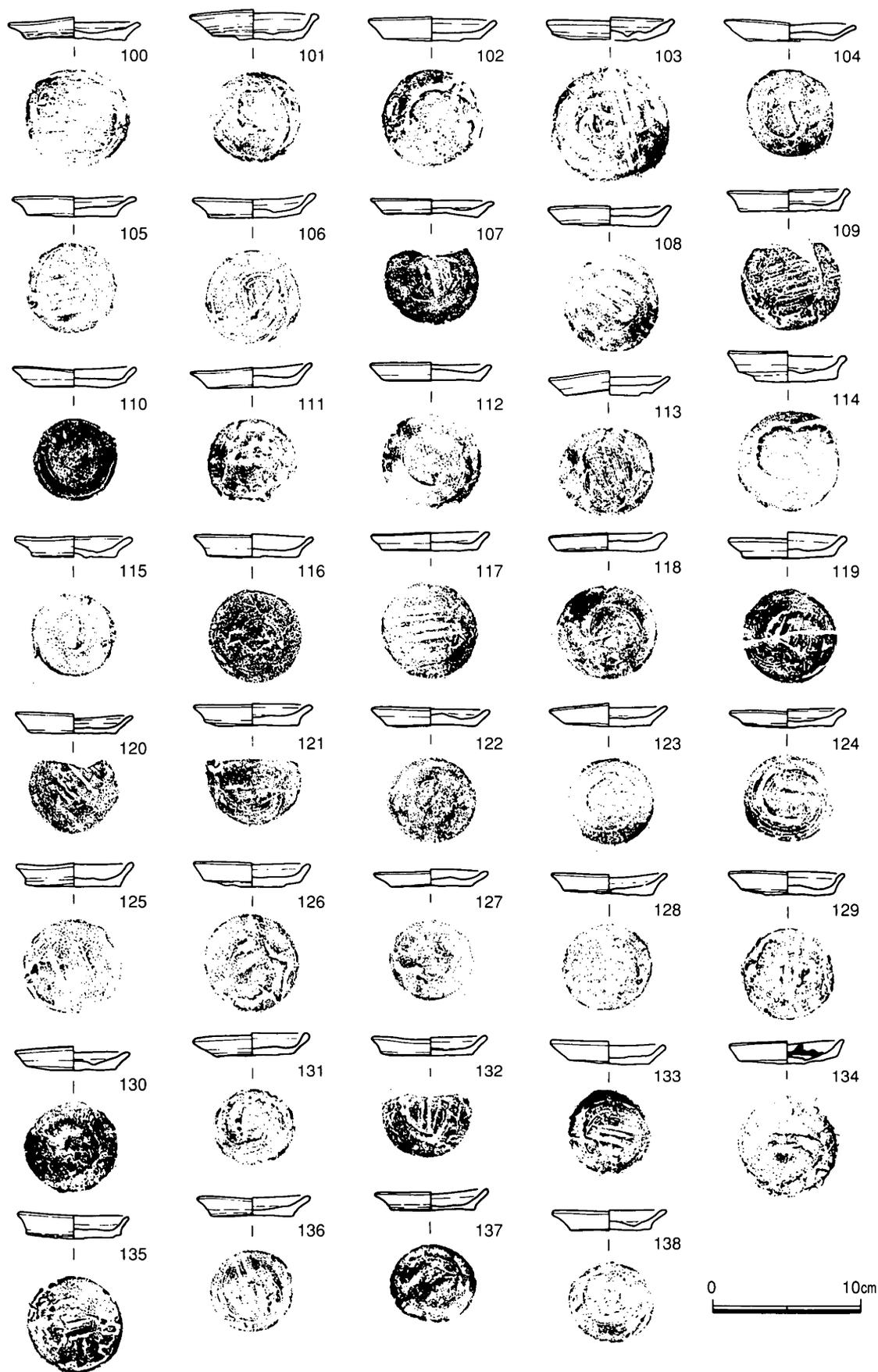
第19図 砂子遺跡SD01 出土遺物(1) (S=1/4)



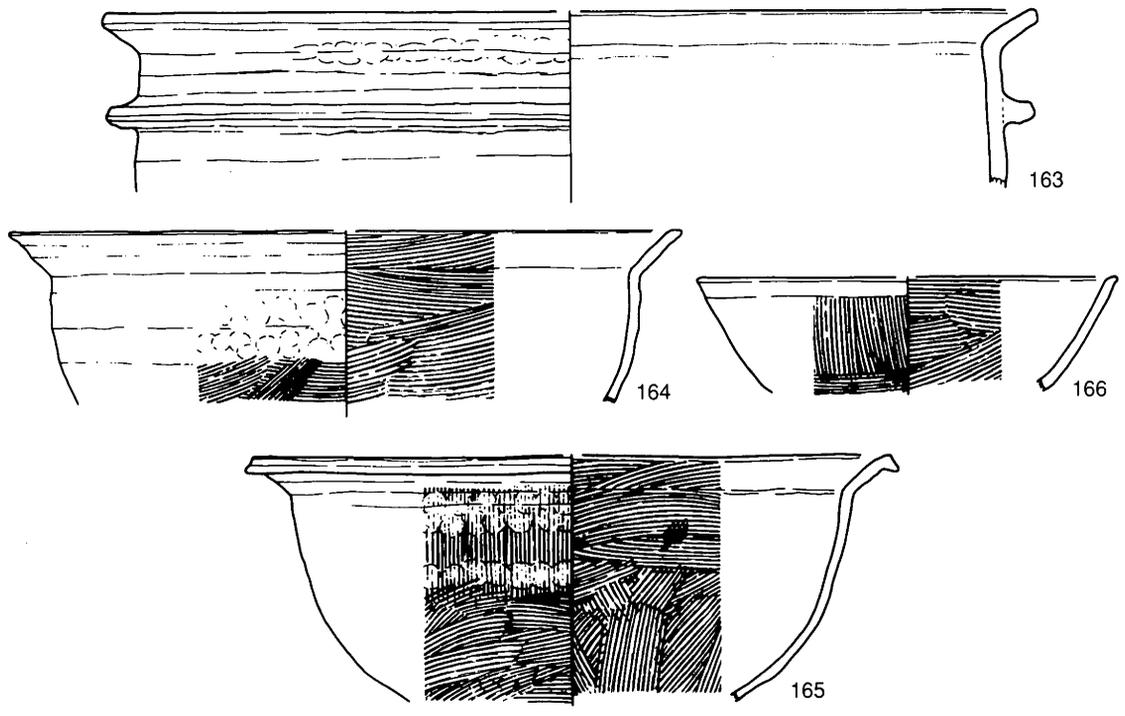
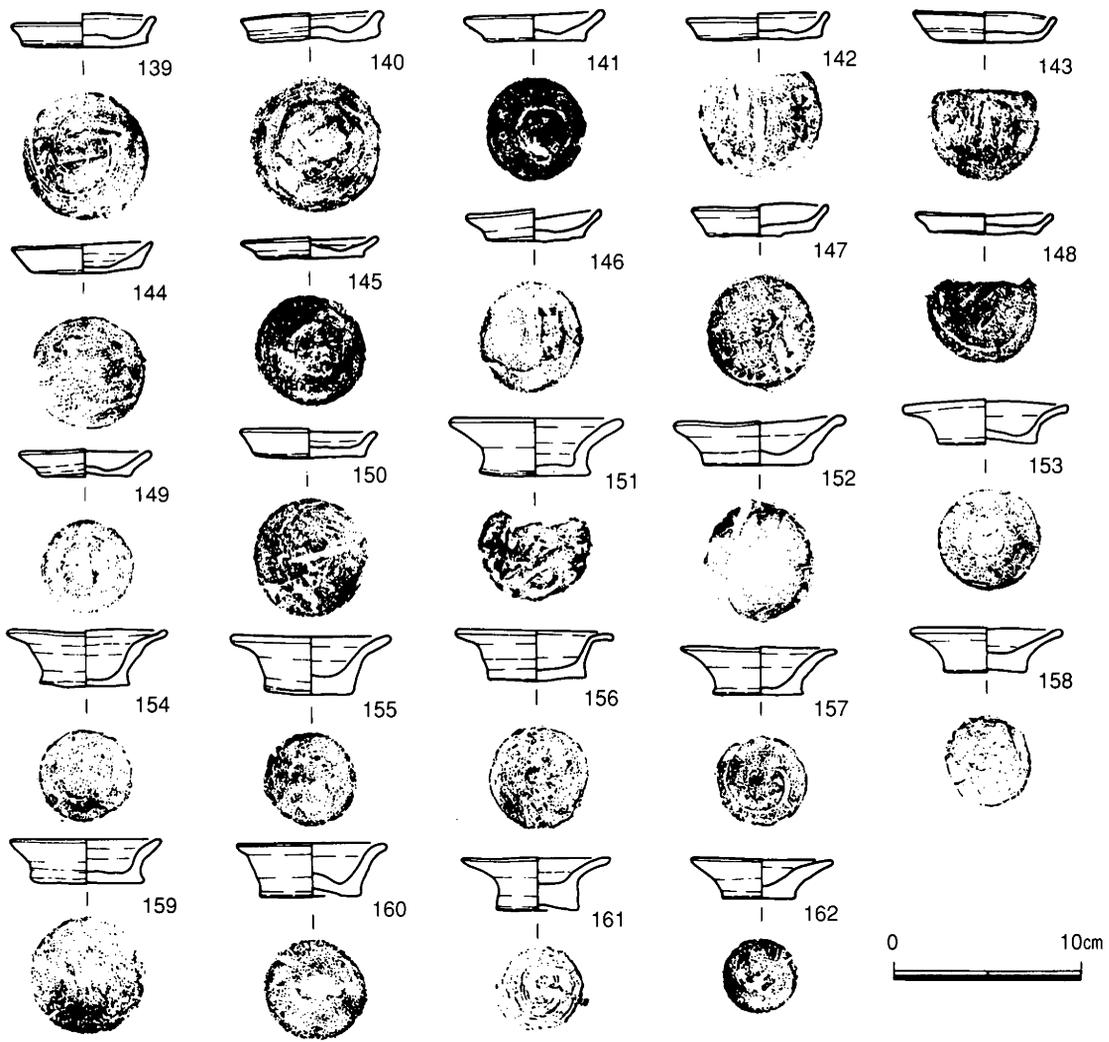
第20図 砂子遺跡SD01 出土遺物(2) (S=1/4)



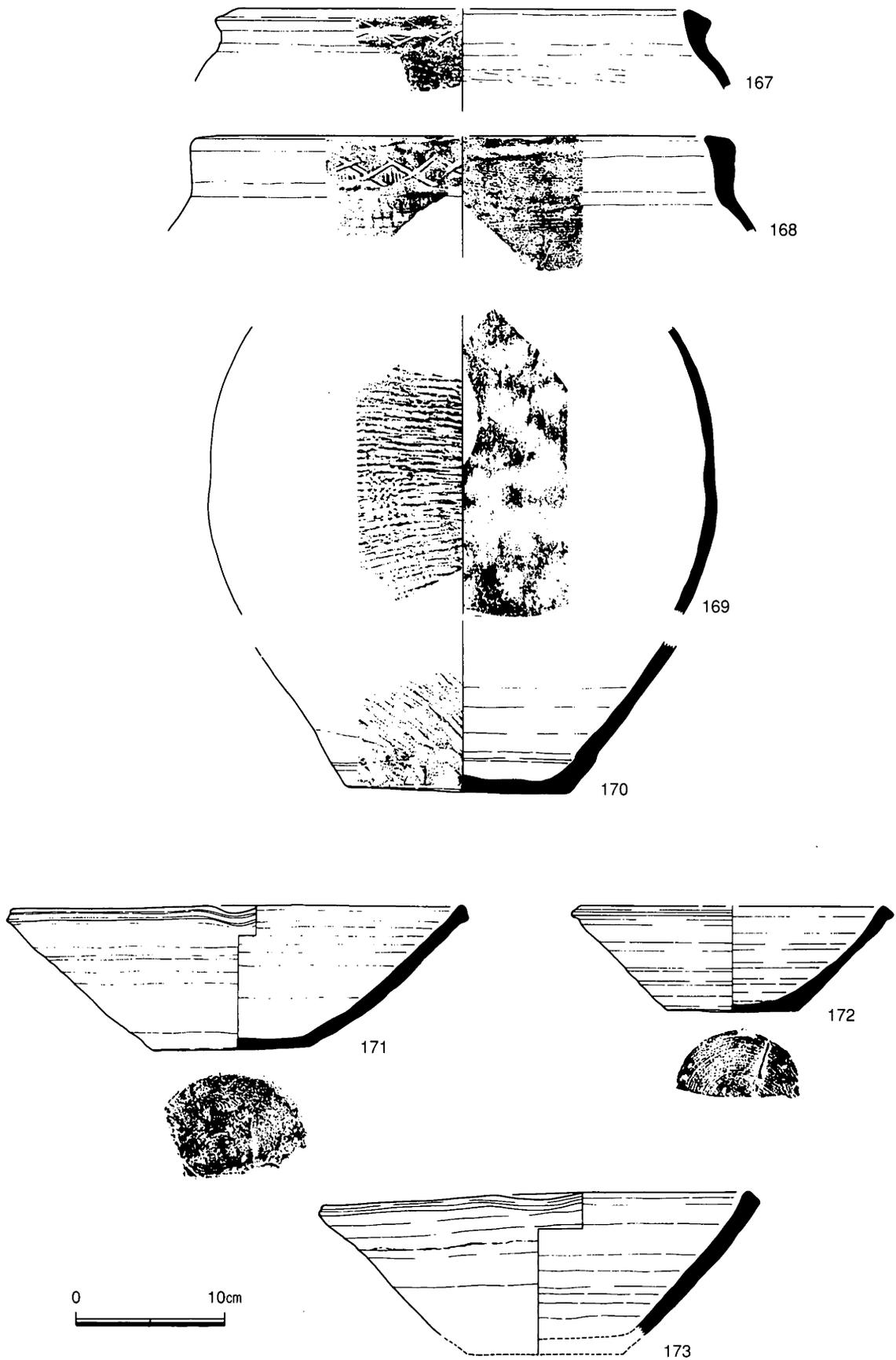
第21図 砂子遺跡SD01 出土遺物(3) (S=1/4)



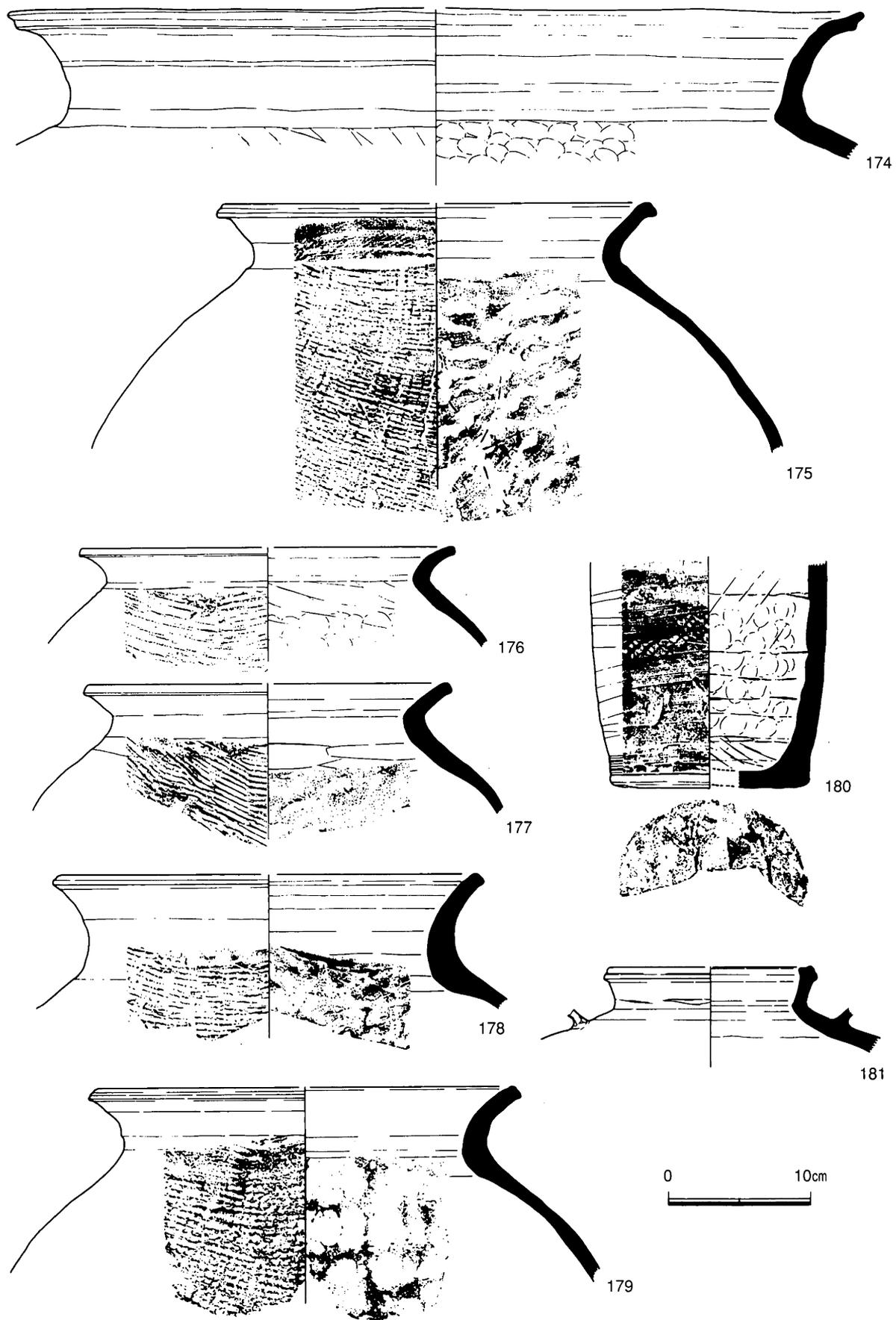
第22図 砂子遺跡SD01 出土遺物(4) (S=1/4)



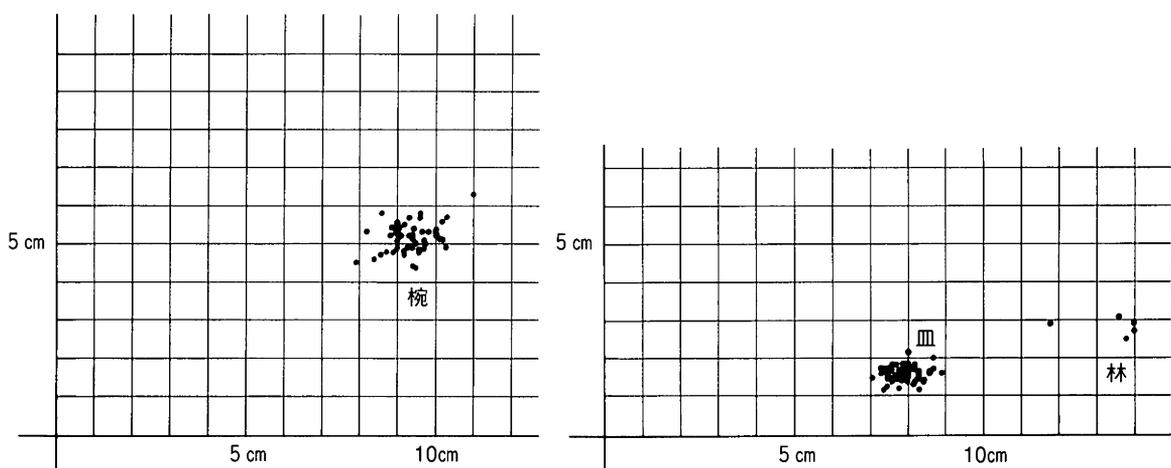
第23図 砂子遺跡SD01 出土遺物(5) (S=1/4)



第24図 砂子遺跡SD01 出土遺物(6) (S=1/4)



第25図 砂子遺跡SD01 出土遺物(7) (S=1/4)



第26図 土師器椀・皿法量分布図

この時期の土器の器種・器形の組成は水系単位程度の地域色が顕著であり、当地域内の詳細な土器編年が完成していない現段階では土器群の性格と実年代に、これ以上言及し得ず本報告で再考したい。大溝に土器を投棄した段階の遺構は、大溝北側の西半に集中しており、多数の柱穴・土塼と小礫を用いた整地跡を検出した。これらの遺構について現時点に於いては検討中のため、正確な建物配置を確定し得ていないが、同じ位置での短期間の建て替えが顕著なため、集落は12世紀末葉を中心とする数十年間の存続期間が想定できよう。

大溝埋没後の南側東半の調査区からは、主として14～18世紀と考えられる柱穴・土塼・集石遺構が集中して検出された。特に18世紀の屋敷遺構では段丘の斜面部を平坦に造成し、土間状に叩き締めた整地層面に掘り込まれた風呂釜の焚き口・埋め甕・石敷の暗渠水路等を確認した。

この他に古墳時代の竪穴住居址9軒と奈良時代の建物1棟が確認された。古墳時代の住居址は大溝の北側にも広がっている点から推定して、中世に大溝が掘られ屋敷地として階段状に平坦化して現在の景観に近い様相が形成される以前は、段丘上の緩やかな斜面に集落が営まれていたと考えられる。古墳時代の住居址は調査区南寄りに集中しており、前期のSH01以外は竈が付設された6世紀後半の所産とみられる。このような集落の在り方は、平成12年度も調査を継続中の、集落中心部と考えられる県道南側の調査区に於いても同様の時期、密度を示すことから、遺跡全体では100軒を優に超す住居址の存在が想定されている。

また、平成12年度より調査に着手した県道南側調査区の丘陵の斜面部で、同時期の大規模な製鉄関連遺構が確認されたことから、この集落が6世紀初頭から8世紀前半まで継続する、製鉄を生産基盤とした集団であることも次第に明らかになりつつある。

奈良時代の建物は今年度の調査区では1棟が確認されたのみであるが、平成12年度の県道南側調査区では不規則な配置ながら同様の建物と土塼が複数検出されており、特に倉庫とみられる建物が多い点が特色である。(武田)

- (1) 木札の判読については岡山大学文学部久野修義教授に懇切な御教示を得た。また、赤外線テレビ撮影については、岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの御好意より、御多忙中にもかかわらず快諾を得、撮影の労を頂いた。記して厚く感謝申し上げます。



第4図版 砂子A遺跡遠景（東から）



第5図版 砂子A遺跡調査区全景

東総社中原本線改良事業（三須地区）に伴う発掘調査

遺跡名 牛神遺跡，東田遺跡

所在地 三須1186番地10外

調査期間 1999年12月13日～2000年3月

調査面積 2,500㎡

調査概要

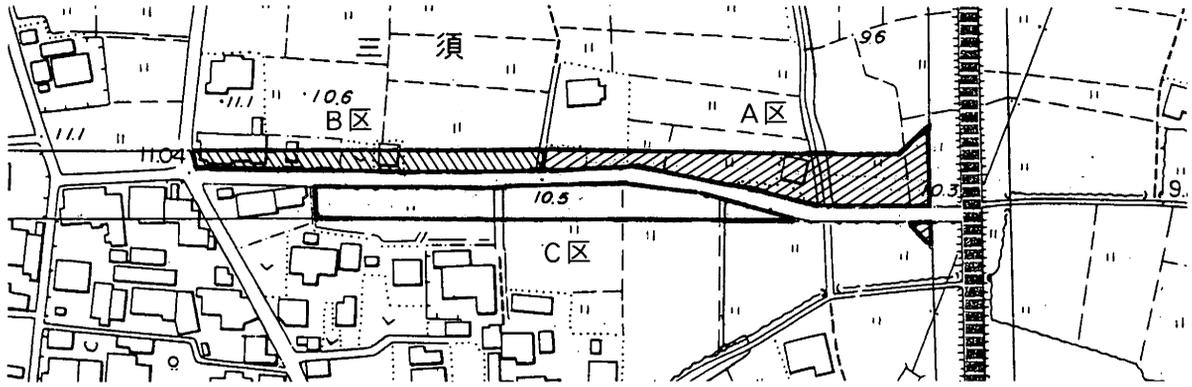
岡山県南広域都市計画道路事業の一環として、西は国道486号線，東は国道429号線と接し岡山市と倉敷市を結ぶ重要な幹線として東総社中原線の建設がかねてから計画されていた。すでに中央区画整理事業，駅南区画整理事業によって，部分的に建設済み，あるいは工事途中の箇所もあるが，それらと国道429号線を接続すべく1999年度から三須地区の工事に着工することとなった。2004年度の開通をめざし工事は急ピッチで進められる予定である。

調査地周辺には，国道429号線を挟んで東に，三須・畠田遺跡，三須・中須賀遺跡など弥生時代～中世の集落跡も確認されている。しかし，ここで特に注目すべきは「郡殿」の墨書土器を出土した奈良時代の官衙関連遺跡，三須・河原遺跡^註の存在であり，この地が窪屋郡の中核であったことがうかがわれることから，当該調査地にも関連遺構が広がる可能性は高いものと思われる。

さらに，今回の調査区には，白鳳～奈良時代に存在したとされる幻の寺，三須廃寺の推定域が一部含まれていることから，協議を行い設計変更も申し入れたが，寺域が確実に押さえられていない現段階での設計変更は非常に困難であるため，発掘調査時に重要な遺構が確認された場合は別途協議するという事で合意した。



第27図 調査地位置図（S=1/8,000）



第28図 調査区位置図 (S=1/2,500)

調査は国道429号線接続部分から入ることとなった。道路建設予定地内に生活道が存在するため、道路を挟んで区分けし、まずA区から調査に入った。今年度中にA・B・C区すべての調査を終了する予定であったが、用地買収等の都合から着手時期が遅れたため、A区を終了した後B区の一部を調査したにすぎなかった。

以下A区から概要を述べる。

A 区 (牛神遺跡)

上下2面の遺構面が確認され、上層からは中世～近世の遺構が検出された。

近世の遺構としては、溝およびたわみが検出されたにすぎない。

中世の遺構は、建物7棟、柱穴、土壇、溝、溝条遺構、たわみ等が確認されている。建物は、柱穴規模は小さいものの方を合わせて群を形成している。また切り合いから少なくとも2時期以上にわかれるものと思われる。

遺物は全体的に少ないが、調査区東端に約1/2ほど検出された大型の土壇からは、須恵器や土師器、瓦等の比較的大きな破片が出土している。

下層からは弥生時代～古代の遺構が検出されたが、住居址や建物などはみられず柱穴や土壇等の遺構も極めて少ない。溝が主体となっており、調査区東半では十条近く重複して検出されたのを始め多数の溝が認められた。また遺物も少なく、この調査区が集落からややはずれた位置に存在することが窺われる。

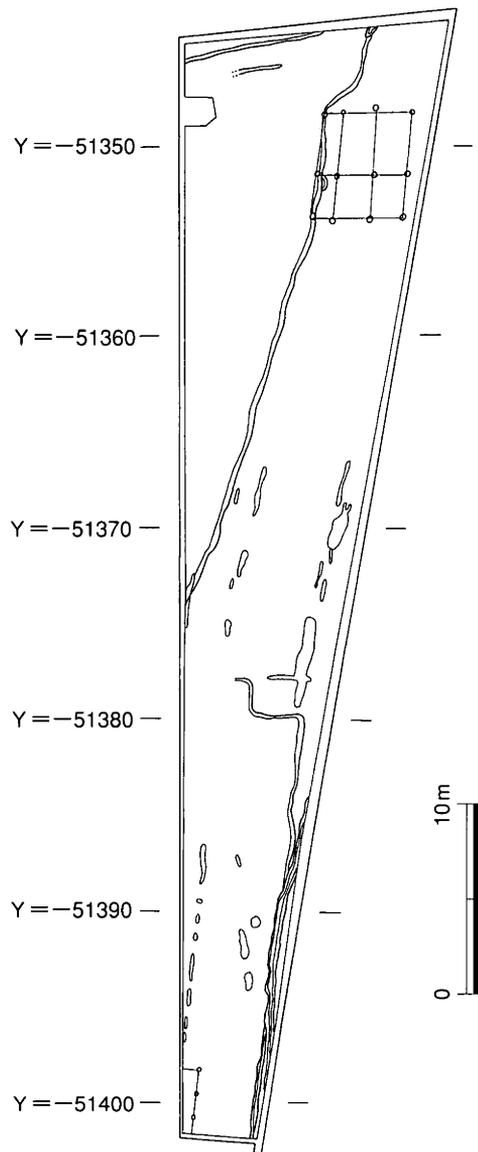
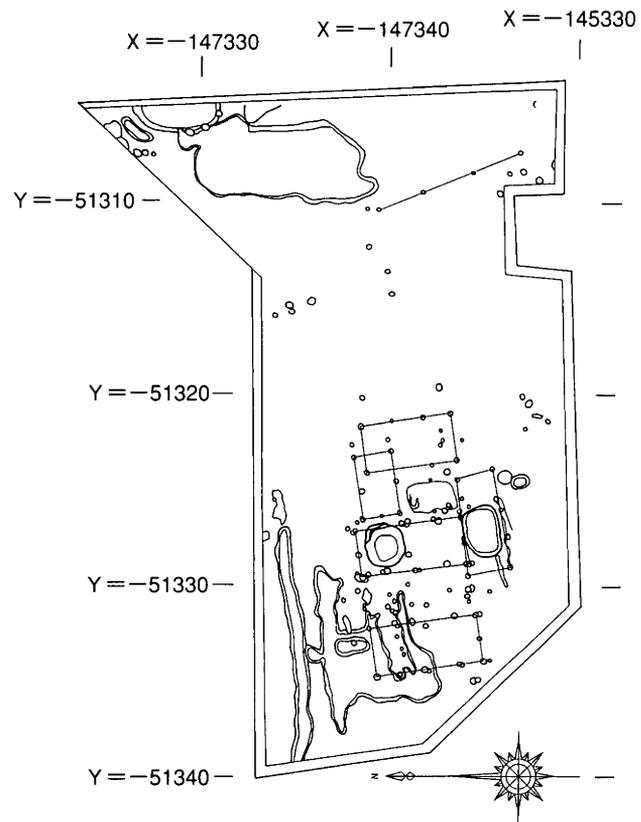
遺物は少ないながらも、弥生時代～古墳時代の土器が出土している。遺構に伴う最も古い遺物としては、弥生時代中期後半の土器があげられる。

B 区 (東田遺跡)

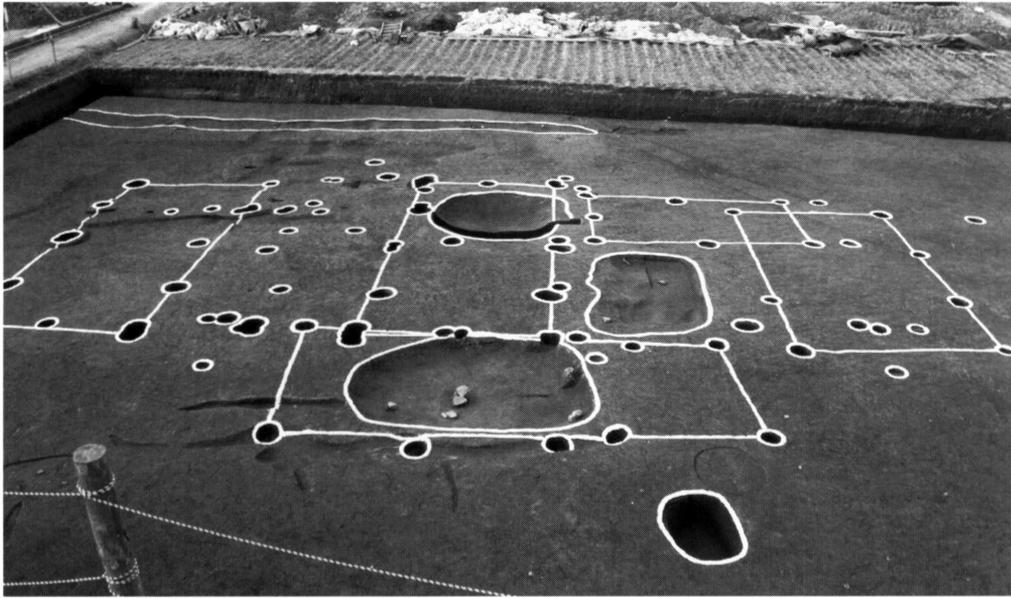
今年度は一部の調査に終わったが、遺構密度は低く、B区東半北側では微高地の下がり方が確認された。微高地の斜面からは弥生時代～古代の遺物が出土したが、詳細は来年度の概要報告に譲る。

今回の調査区は三須廃寺の推定域に一部含まれてはいたが、明瞭な寺跡関連の遺構は確認できなかった。しかし、白鳳期～奈良期の瓦を始め磚など量は少ないものの寺跡の存在を想起させる遺物も出土していることから、今後の調査に留意していきたい。(平井)

註 武田恭彰「三須地区県営ほ場整備に伴う確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』7 1997



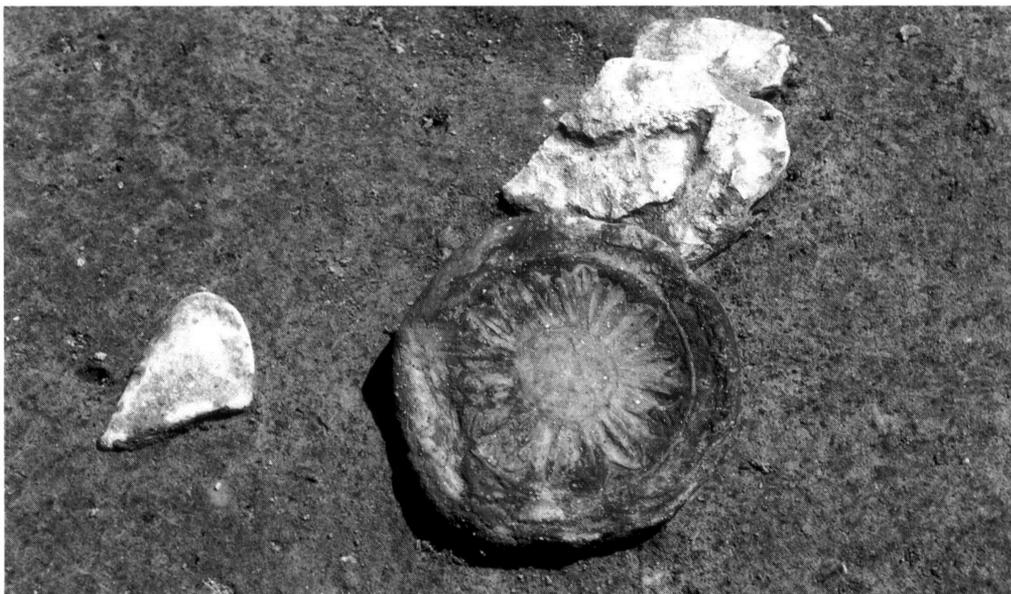
第29図 中・近世遺構配置図 (S=1/400)



第6図版 A区 中世の建物群(南から)



第7図版 A区東半 下層遺構空撮



第8図版 B区 軒丸瓦出土状況

駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺跡名 上三本松遺跡, 上川田遺跡, 西楨前遺跡, 中通遺跡2・3区, 西三軒屋遺跡

所在地 総社市三輪地内

調査期間 1999年4月2日～2000年1月14日

調査面積 約3,000㎡

(調査経緯)

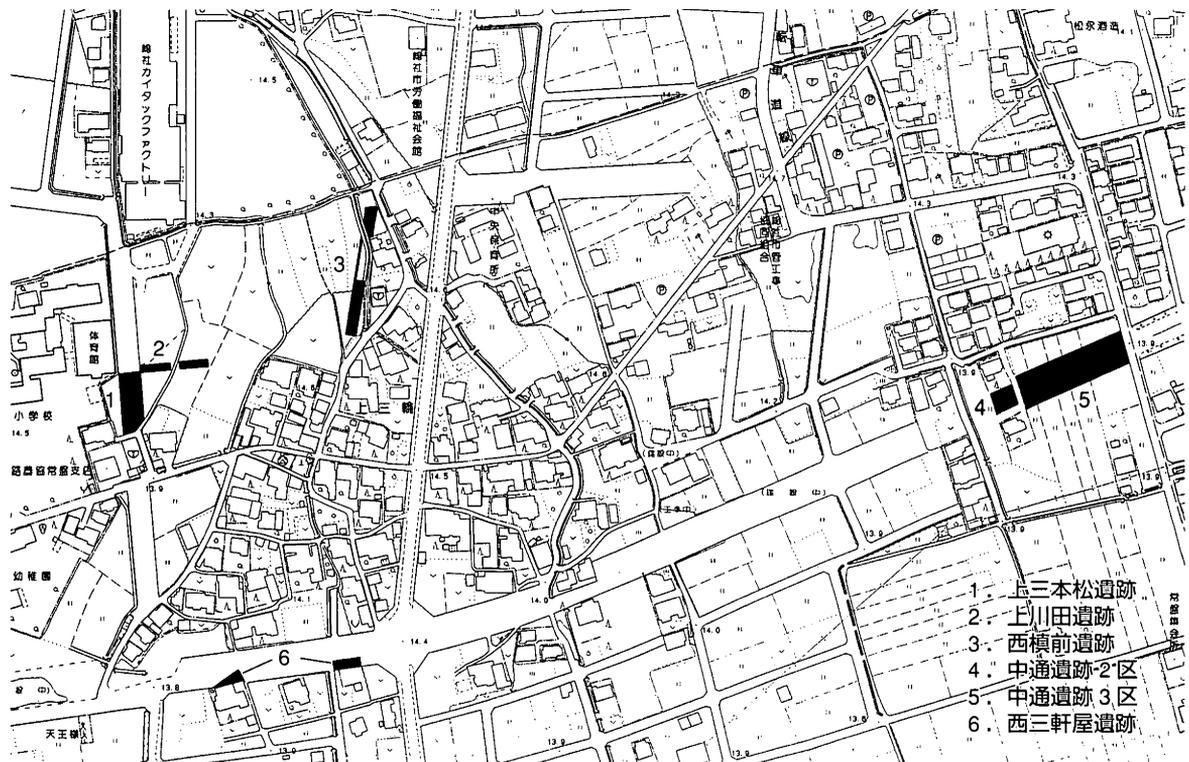
総社駅南部地域を対象とする区画整理事業に伴う1999年度の発掘調査は、例年と同じく、工事工程に合わせながらの調査となったため、地点を変えながら、複雑な調査工程となった。

はじめに中通遺跡2区、次いで中通遺跡3区→上三本松遺跡→上川田遺跡→西楨前遺跡、最後に西三軒屋遺跡のうち、1995年度の調査で家屋の移転がなされていないため未調査であった部分についての調査、の順で実施した。

(調査概要)

中通遺跡2区では、土壌・柱穴・地形の下がり等が検出され、比較的多くの縄文土器片が出土した。出土した土器は、縄文時代後期～晩期のものと考えられた。

中通遺跡3区では、上下2面の調査をおこなった。上面では、調査区の北西角から南東に斜めに流れる溝と、その周りに柱穴、土壌、溝状遺構が認められた。溝は、ほぼ同じ流路で切り合いが認められることから何度も掘り返されていることが明らかになった。土壌は円形のものと、不整形のものがあり、埋土中に炭・焼土片が多く含まれているものが認められた。これらの遺構の密度は東に行くにしたがって希薄になっていた。上面の溝の下層からは、弥生時代後半の幅4～5mの大溝が検出された。大溝中からは、ほぼ完形の甕形土器などが出土している。



第30図 調査地位置図 (S=1/5,000)

上三本松遺跡は、1996年度、1997年度に今回の調査地の北側を発掘調査しており、官衛的性格の強い遺構・遺物が検出されている。今回の調査地は、微高地の端部と考えられ、少量の柱穴、溝状遺構、水田を作る際のカット面等が検出されたのみであった。調査区の北端では、微高地からの斜面堆積と考えられる黒色土層が斜めに堆積しているのが確認された。

上川田遺跡の西端では、微高地の端部が検出され、東に行くにしたがって低湿地になっていく地形の下がりが見出された。微高地の端部では、柱穴と2本の溝状の遺構が検出され、土器片・瓦片・礫等が出土している。低湿地は水田として利用されていたと考えられ、稲株の痕跡が検出された。調査区以東は、確認のトレンチを掘削したところ遺構の存在が確認されなかった。

西楨前遺跡は、入り組んだ微高地に位置していると考えられ、調査区の北端と南端に遺構が認められた。北端の遺構は、溝・溝状遺構・土壇・柱穴であり、土壇は縄文時代の遺構の可能性が考えられた。南端の遺構は、溝・溝状遺構・柱穴・土壇であり、溝からは6世紀中葉～後葉にかけての須恵器・土師器等が良好な状態で出土した。土壇は、北端の調査区と同じく、縄文時代の遺構の可能性が高いと考えられた。

西三軒屋遺跡では、上下2面の調査を行った。上面からは溝状の遺構とたわみが、下面からは縄文時代の遺構と考えられる円形・不整形の土壇が検出された。

(高橋)



第9図版 上三本松遺跡完掘状況



第10図版 西楨前遺跡完掘状況



第11図版 中通遺跡3区上面完掘状況



第12図版 中通遺跡3区下面大溝完掘状況

総社市立常盤幼稚園園舎移転新築工事の設計変更に伴う埋蔵文化財発掘調査

遺跡名 上三本松遺跡

所在地 総社市三輪764-2, 771-1, 773-1, 930-7, 930-14

調査期間 1999年4月12日～6月15日

調査面積 約380㎡

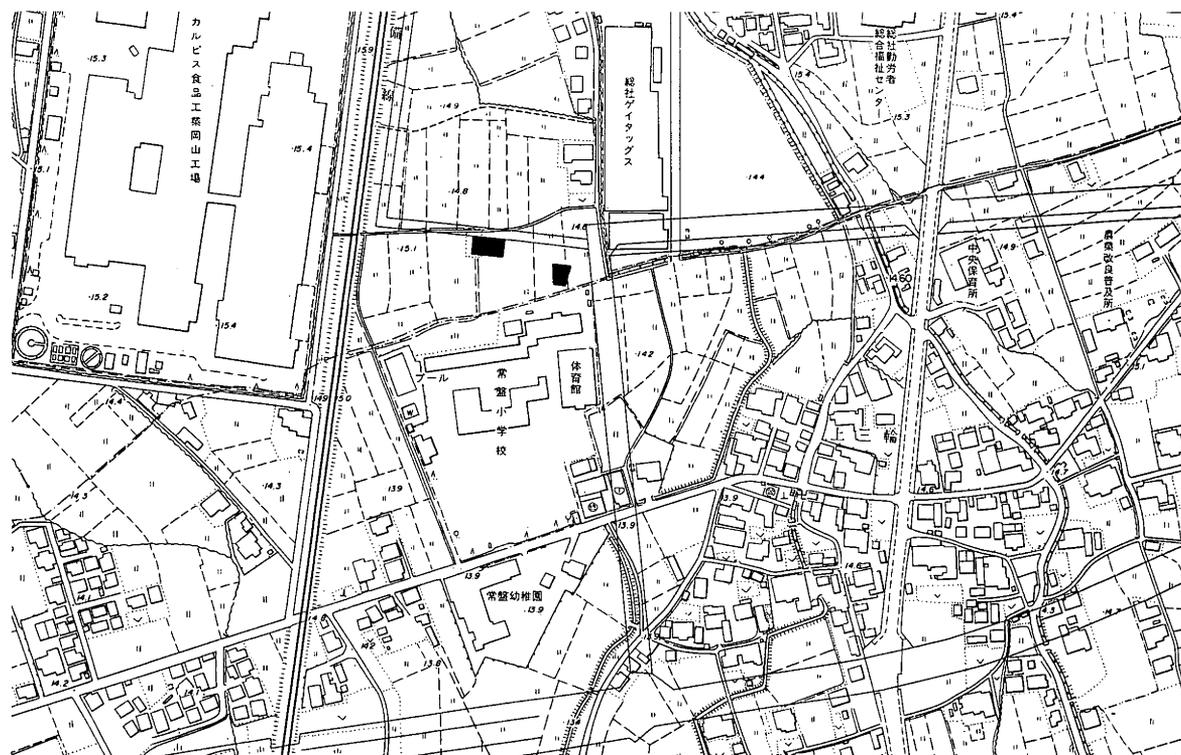
(調査経緯)

総社市立常盤幼稚園は、施設の老朽化等の理由と、総社駅南地区区画整理事業に伴い仮換地されたことから敷地を移転し、新築工事が行われることとなった。これを受けて総社市教育委員会は、1998年度に建設予定地の発掘調査を実施した。ところがその後、計画の変更が行われ、前計画地より、東西に建物敷地が延長されることとなった。総社市教育委員会では2階建化など代替案を検討したが、幼児の安全管理等の理由から拡張することになった。今回は、未調査の拡張部分のみ、発掘調査を実施した。

(遺構・遺物)

昨年度の園舎予定地の発掘調査及び、周辺で実施された駅南区画整理事業に伴う発掘調査の結果から、園舎部分は中洲状の微高地上に位置していると推定される。この微高地は、形成された時期に差があると考えられ、弥生～古墳時代の遺構は、西半の縄文時代前期以前に形成された古い微高地上に広がっており、住居址、土壇、柱穴、微高地の下がりに沿う溝などが検出されている。古代～中世の遺構は、東半の新しい微高地上に広がっており、柱穴多数と土壇・溝などが検出されている。今回の調査でも、前回の状況とほぼ同じ状況が確認された。

西側調査区は、古い微高地上に位置しており、住居址4のほか柱穴、土壇等が検出された。住居址



第31図 調査地位置図 (S=1/5,000)

は、弥生時代後半から古墳時代前半かけての円形及び隅丸方形のもので、切り合いが認められた。このうち調査区のほぼ中央で検出された隅丸方形の住居址には、拡張が認められ、壁体溝の一部で壁体の痕跡が認められた。住居址を切る柱穴や、住居址周辺にある柱穴の中には建物と考えられる並びのものもあったが、調査区内では、全形を明らかにすることが出来なかった。またこの遺構面の下層からは、微高地の下がりに平行する2本の大きな溝が検出され、この溝を埋めて住居址や建物が作られており、弥生時代中期頃には埋められていたことが明らかになった。

東側調査区は、新しい微高地上に位置しており、多数の柱穴、溝状の遺構、土壙等が切り合って検出された。この調査区に東接する駅南幹線1号道部分の調査では、官衙関連の遺構と推定される建物等が検出されているが、この幼稚園園舎の発掘調査では確認することができなかった。（高橋）



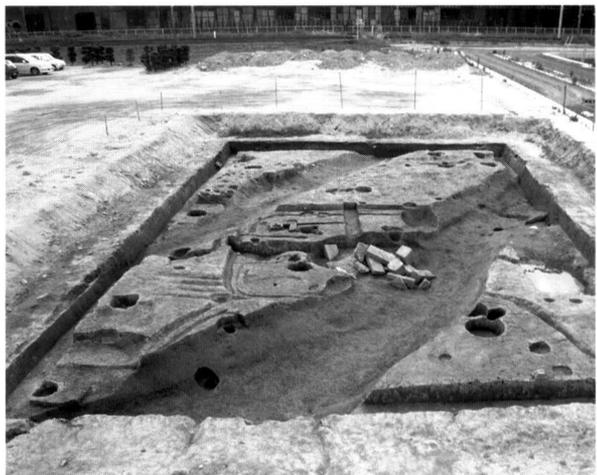
第13図版 調査地全景



第14図版 東側調査区完掘状況



第15図版 西側調査区住居址完掘状況



第16図版 西側調査区完掘状況

吉備路観光センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査（本体部分）

遺跡名 天満遺跡

所在地 総社市三須825-1外

調査期間 2000年2月1日～3月15日

調査面積 約1,380㎡

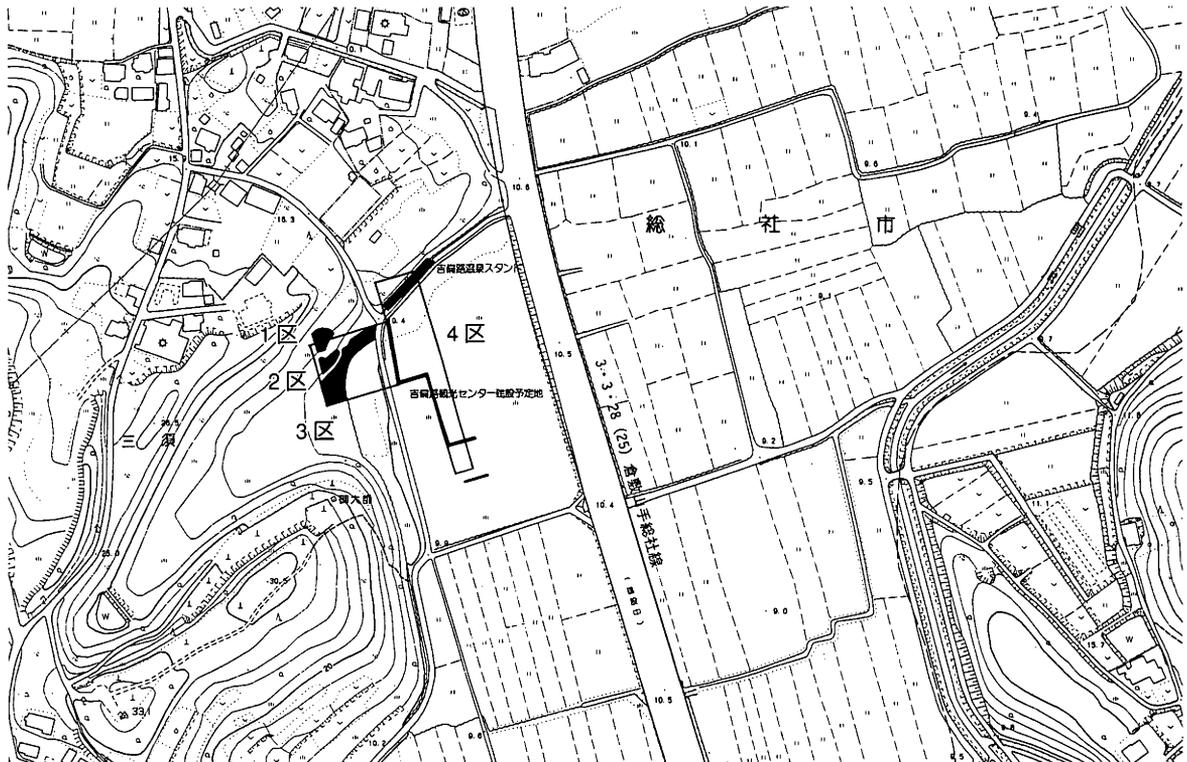
（調査経緯）

昭和61年に、吉備路及び県南観光の拠点として「観光センター」構想が発足して以来、温泉の掘削をはじめ、宿泊施設（国民宿舎）・土産物（特産品）販売・観光情報提供・多目的広場・コンベンションホールなどの施設の整備が計画された。これを受けて総社市教育委員会では1989年度に確認調査を実施した。また、1991・1992年度には公有地化が行われている。

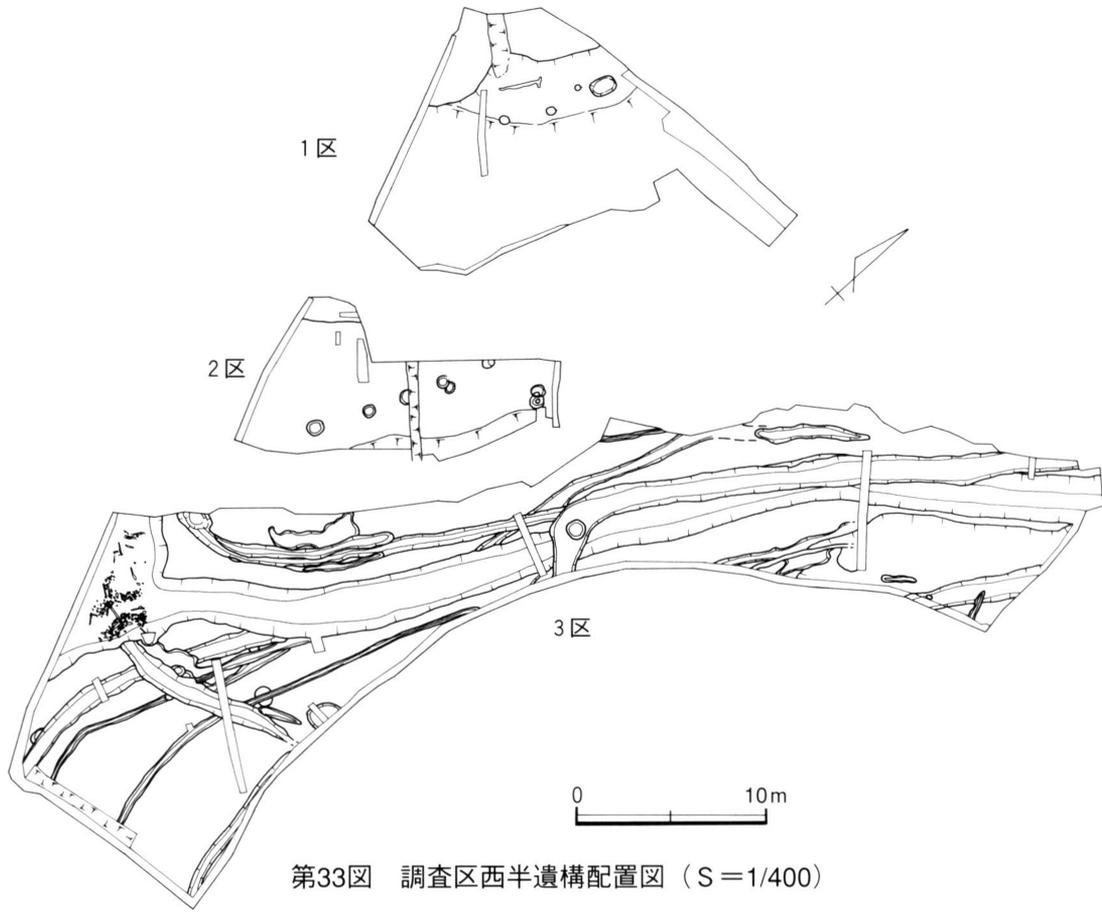
（調査概要）

調査地は、三須丘陵の北東斜面端部から水田面にかけて広がっている。水田部は、低湿地を水田として連綿と利用していることが明らかになった他は、遺構・遺物ともに認められなかった。

丘陵斜面は開墾によって段状に加工されていたため、現状の段にあわせて3つの調査区を設定した。遺構は削平されており、標高の高い所ほど残りが悪かった。標高15m付近の、調査地のなかでは一番高い北側の調査区では、弥生時代頃と推定される柱穴や、土壙状の遺構が検出された。真中に位置する、標高11～12mの二段目の調査区では、一列に並ぶ柵列状の柱穴が検出された。南側の一番低い標高8～9mの所に位置している調査区では、丘陵と水田の境に地形に沿って溝が重なり合って流れ、一番大きい溝-1には木杭によって流路やしがらみが組まれていることが明らかになった。（高橋）



第32図 調査地位置図（S=1/5,000）



第17図版 調査前全景 (東から)



第18図版 2区完掘状況 (西から)



第19図版 3区完掘状況 (西から)



第20図版 3区溝-1西端木杭出土状況 (東から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	そうじゃしまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	総社市埋蔵文化財調査年報
副書名	
巻次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報
シリーズ番号	10
編著者名	谷山雅彦, 武田恭彰, 平井典子, 高橋進一
編集機関	総社市教育委員会
所在地	〒719-1192 岡山県総社市中央一丁目1番1号 TEL0866-92-8363
発行年月日	西暦2001年3月31日

総社市埋蔵文化財調査年報 10

2001年3月31日 印刷

2001年3月31日 発行

編集発行 総社市教育委員会
総社市中央一丁目1番1号

印刷 柳本印刷株式会社
総社市総社一丁目10番24号

